高槻市文化財調査概要XV

―― 発 掘 調 査 報 告 会 ――

新　池　遺　跡

高　槻　市　教　育　委　員　会

はじめに

大阪府の北部に位置する三島地方は、悠久の淀川の流れによって育まれた地味豊かな土地柄に加え、東西に開かれた交通の要衝としても発展してきたところであります。それゆえに、旧石器時代以来、じつに数多くの遺跡がのこされており、まさに埋蔵文化財の宝庫ともいえる地域であります。この三島の東半部を占める高槻市では、これまでに120カ所以上の遺跡が確認されていて、そのなかには史跡今城塚古墳・阿武山古墳・嶋上郡衙跡をはじめ、著名なものだけでも郡家今城遺跡・安満遺跡・高槻城跡など、枚挙に暇がありません。

こうしたなかで、高槻市教育委員会では一昨年の秋より、高槻市上土室におきまして新池遺跡の発掘調査を実施し、埴輪窯・工房・工人集落などの貴重な遺構を多数検出しました。そして平成２年３月24日には新池遺跡発掘調査報告会「よみがえるハニワのふる里」を開催し、調査成果の概要を報告するとともに、和田萃・和田晴吾のお二方の先生にご講演をいただいたところであります。

この冊子は、新池遺跡の発掘調査を契機として、さらに一人でも多くの方々に文化財に対する理解を深めていただければと思い、取りまとめたものであります。最後に新池遺跡の調査にご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げる次第であります。

平成２年12月28日

教育長　藪　重彦

新池遺跡

発掘調査報告会

《プロローグ》

『日本書紀』に「摂津国三島郡埴廬」と記されている新池遺跡で、日本でも有数の埴輪生産遺構が発見された。この三島の地には淀川北岸地域で最大の太田茶臼山古墳や真の継体陵とされる今城塚古墳、さらには狩猟埴輪群を検出したことで有名な昼神車塚古墳など、多くの古墳が点在している。これらの古墳に立て並べられたおびただしい量の埴輪群像は、被葬者の権威の一端をあらわすものでもあったのだろう。家・盾・甲冑・武人・巫女・犬・猪、これらはすべて新池遺跡で焼かれたものであった。いつ、だれが、どのようにして。その答は一朝一夕には出てこないだろうが、それはやがて、「なぜ継体大王がこの地に葬られたのか」という問題にも結びついていくに違いない。みなさんも、この講演会をひとつの手掛かりとして、三島地方の古代史を綴ってみてください。

《プログラム》

日　時　平成２年３月24日午後１時～４時20分

会　場　高槻市役所　６階　大集会室

挨　拶　ＰＭ1：00～1：05

高槻市立埋蔵文化財調査センター所長　冨成　哲也

講　演　ＰＭ1：05～1：35

「新池遺跡にみる埴廬」

高槻市立埋蔵文化財調査センター技師　森田　克行

講　演　ＰＭ1：35～2：50

「古墳祭祀と埴輪」

立命館大学助教授　和田　晴吾

休　憩　ＰＭ2：50～3：00

講　演　ＰＭ3：00～4：20

「新池遺跡と土師氏」

京都教育大学教授　和田　萃

〈司会〉高槻市立埋蔵文化財調査センター次長　大船　孝弘

よみがえるハニワのふる里

―新池遺跡発掘調査報告会―

あいさつ

はじめまして、埋蔵文化財調査センターの冨成でございます。足元が悪いなか、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

本日は歴史講座といたしまして、新池遺跡の調査報告会を開催させていただきます。とくに今日は和田晴吾先生・和田萃先生にお越しいただきまして、新池遺跡をひとつの手掛かりとしまして、埴輪の生産や古墳の祭祀などについて、皆さんとともにいろいろと勉強していきたいというふうに考えております。この新池遺跡につきましては、昨年の12月３日に現地で説明会を開催させていただきました。今回は、『日本書紀』という古い書物のなかに、この高槻の土室の記事が載っておりまして、その土室の一画が開発されるということで、昭和63年９月より発掘調査に入りました。調査のほうはもうあと１ケ月少々で終ろうとしております。その過程で埴輪生産に関する重要な遺構をはじめ、いろんな新しい事実が出てきました。この調査の概要につきましては、これからみなさんに報告させていただきますけれども、また詳しいことにつきましては、調査報告書や冊子などでみていただく機会があろうかと思います。いま高槻市では、日本の古代史のなかで重要な位置を占めますこの新池遺跡をどのように保存していこうかと、日夜努力しているところでございます。これは皆様方の絶大なるご声援とご支持をいただかなければ、成し遂げられないというふうに考えております。そのときにはよろしくお願いしておきます。私の挨拶はこれで終らせていただきますが、新池遺跡の重要なところはどこか、というところまでお話がすすんでいただければ、ありがたいと思います。それではよろしくお願いいたします。～拍手～

司　会

それでは、もう１時を過ぎていますので、そろそろはじめさせていただきます。私は本日の進行役をつとめます埋文センターの大船と申します。慣れない役柄ですが、最後までよろしくお願いいたします。今回の歴史講座はちょっと欲張りまして、三人の方々の発表を午後からの半日でやることになりました。まずプログラムのほうを確認させていただきます。最初に発掘を担当しました森田技師から「新池にみる埴廬（ハニイホ）」というテーマで発表していただきます。それからあと引き続きまして、立命館大学の和田晴吾先生の「古墳祭祀と埴輪」という

ことで講演をお願いいたします。その後10分間休憩いたします。それから最後に、京都教育大学教授の和田萃先生から「新池遺跡と土師氏」と題して、講演していただきます。

はじめに森田技師の方から発表させていただきたいと思います。森田さんは埋文センターで長年にわたり遺跡の調査を手掛けてこられたベテランの技師でありまして、なかでも高槻城跡・岡本山古墓群などの調査は私達の業界でも高く評価されております。とくに今回の新池遺跡は大規模でありまして、これまでに1年半の間調査を担当してきました。今日は発掘現場の詳しい話をスライドをまじえて発表していただきます。それではよろしく。～拍手～

「新池遺跡にみる埴廬」

高槻市立埋蔵文化財調査センター技師　森田　克行

高槻市教育委員会の森田と申します。新池遺跡の発掘調査は一昨年の9月からはじめまして、これまで足掛3年ということになります。新聞やテレビでいろいろ発掘の調査成果が報道されておりますが、今日はそれらを簡単にまとめてお話しさせていただきたいと思います。

まあ新池遺跡の場所などにつきましては、あとのスライドで触れたいと思います。そこでまずどういったものが出てきたのかを、かいつまんでお話させていただきます。基本的には埴輪工房・埴輪窯といったもので、だいたい5世紀の中頃から6世紀の中頃にかけての埴輪生産遺跡としての側面がひとつ、もうひとつは7世紀後半から8世紀にかけましての、いわゆる考古学でいいますところの掘立柱の建物群からなる集落跡という側面ですね。そういったふたつの大きな側面がございます。今日お話いたしますのは、埴輪の方でございまして、あとのお二人方の和田先生のお話も、私の報告を発展させていくかたちになっていくものと思います。

新池遺跡につきましては、昭和40年代に茨木市に住んでおられる免山先生が考古学の専門誌に報告しておられまして、私達としましても、土室の新池の一画に埴輪窯があるんだということは前々からわかっておりました。教育委員会としましては、今回、そこで宅地開発がおこなわれるということから、確認調査を昭和62年におこないました。その結果、どうも、埴輪窯だけではないと、いろいろなものが出てくる。たとえば住居跡であるとか、あるいはたくさんの奈良時代の土器

が出てくるとか、これは思わぬ成果がありそうだということで、ふつうは埴輪窯を掘ってそれで終わりなんですけど、いやこれは全面発掘しようということになりました。その対象面積が約30,000㎡ありまして、それでさきほど申しましたように一年半以上かけて調査しているのですが、最近ようやく終息してまいりまして、この４月から５月にかけて、一段落ということです。私も正直な話、25年間高槻で発掘調査してきまして、いろんな遺跡を掘っています。古くは旧石器時代のキャンプ地、新しいのは高槻城まで掘っておりますが、まあ新池遺跡ほど、私自身が感動を覚えたといいますか、これは本人がいうのですから間違いないわけでして、ぜひ皆さんにご報告し、喜びを分かち合いたいと。ちょっとオーバーですが、そういった感じで発掘に携わってきたということであります。～笑い～

まずは『日本書紀』ですけれども、私のレジメに若干引用してあります。これは欽明天皇23年11月の条でありまして、朝鮮半島にある任那（みまな）が新羅（しらぎ）によって滅ぼされるという記事に関連して記載されているものですが、その後段といたしまして、「今の摂津国の三島郡の埴廬の新羅人の祖先なり」という一節がございます。皆さんもよくご存知のように、『日本書紀』は奈良時代に編纂されたものでして、この「今」というのは、『日本書紀』が編纂された時と理解されたらいいのですが、文字通り読みますと「摂津国の三島郡の埴廬」というところに、前段の任那滅亡のために本国に帰れなくなった新羅の使節の後裔が住んでいるという、奈良時代の話として、記されております。ここで押えておきたいのは、奈良時代に三島郡の一画に「埴廬」と呼ばれているところがあったということです。「摂津国三島郡埴廬」という順番で並んでおりますから、これはもとより地名として記載されております。古代の場合、とくにこのあたりは「三島郡（みしまのこおり）（三島評）」というふうな呼び方がされておりまして、その範囲はいまの千里丘陵が西の端、東の端がいまの島本町と考えていただければよいかと思います。現在の行政単位でいいますと、茨木市と高槻市と島本町を合わせたのが古代の三島郡の範囲であります。それが大宝律令の段階だと思うのですが、８世紀の初頭に島上郡と島下郡にわかれます。島上郡が現在のほぼ高槻市と島本町の範囲、島下

「欽明紀」二十三年

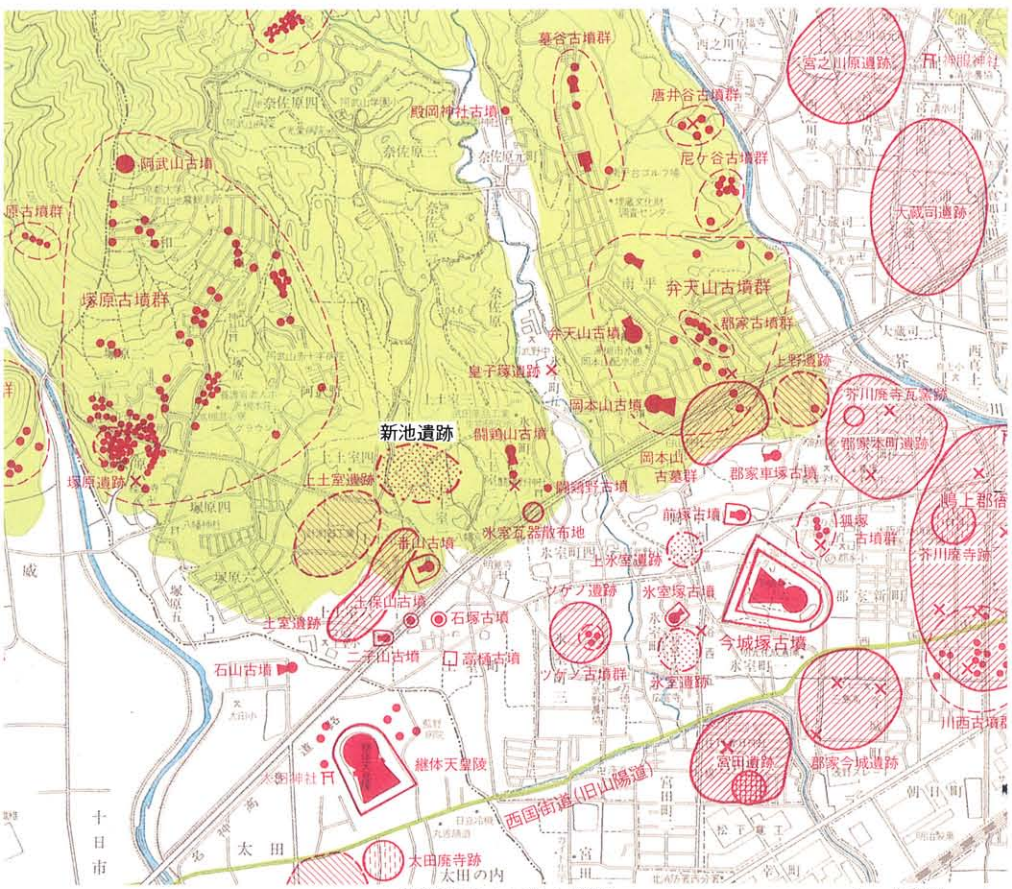
○冬十一月、新羅遣レ使獻、幷貢二調賦一。使人悉知二國家、憤二新羅滅一任那一、不二敢請一罷。恐レ致二刑戮一、不レ歸二本土一。例同二百姓一。今攝津國三嶋郡埴廬新羅人之先祖也。

（「日本古典文学大系」より）

新池遺跡位置図

郡がほぼ茨木市の範囲になります。したがいまして、高槻市と茨木市の原形というのは８世紀初頭まで遡るんだということなんですが、今、私が話しておりますのは、そのもうひとつ前の話で、分立する以前の三島郡(評)として、ひとつの地域的なまとまりがあったなかで、その中心に「埴廬」が存在していたということになります。

これを考古学的にながめますと、三島古墳群というのが、ちょうどこの地域の中央部に存在しております。そのなかでも弁天山古墳群はもっとも古く位置づけられるもので、前期から中期まで連綿として築かれています。あるいは、５世紀の段階ですと、現在の茨木市の太田にございます太田茶臼山古墳、さらには、高槻市の郡家にあります後期の今城塚古墳などが代表的な古墳としてあげられます。そういった大きな前方後円墳を擁する大小500基ぐらいの古墳か

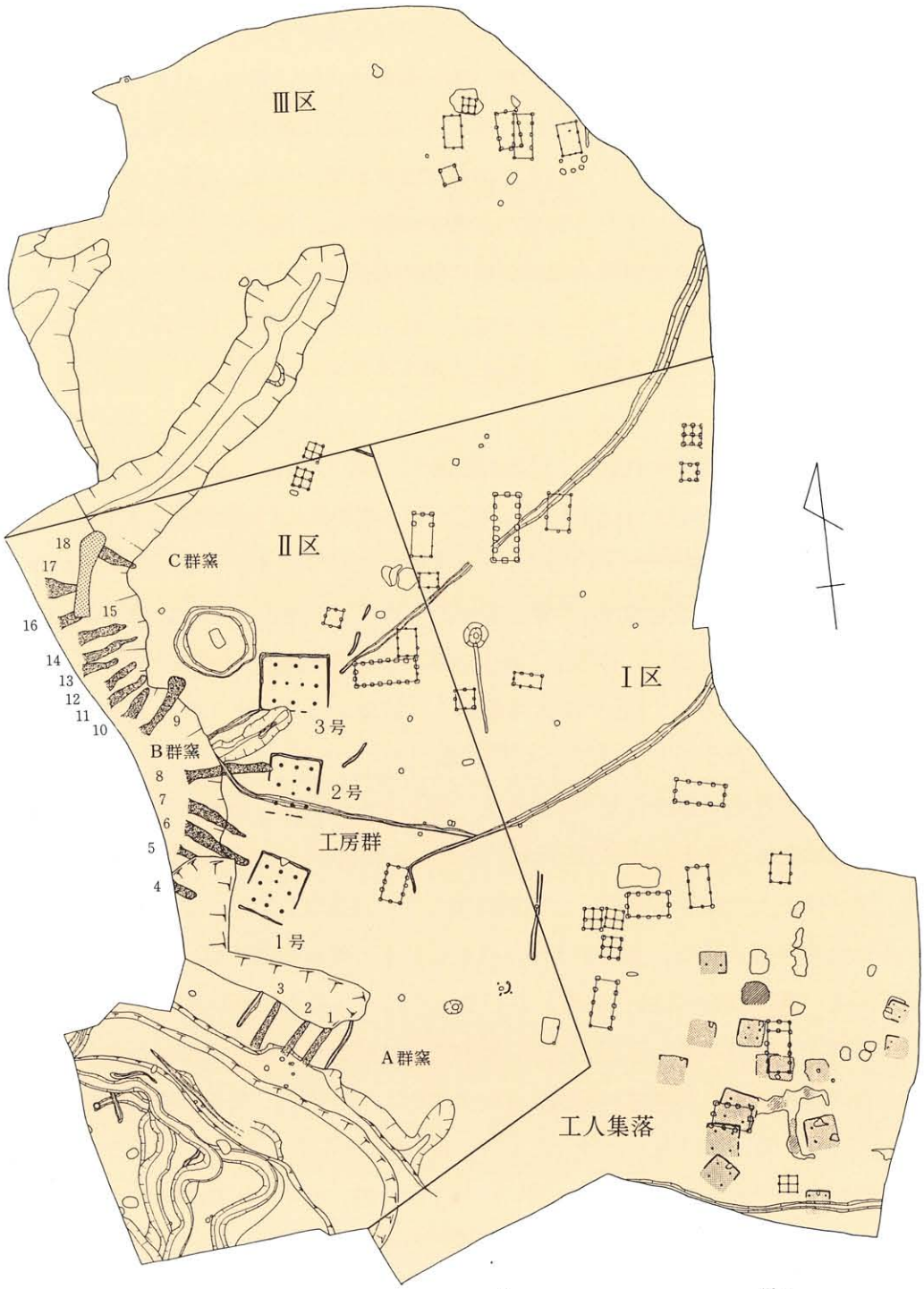


新池遺跡と三島古墳群　　1：25000

らなります三島古墳群の真只中に、この新池遺跡があるという認識が第一にあります。大阪府下で古墳群と申しますと、古市古墳群でありますとか、百舌鳥古墳群など非常に大きな古墳群がありまして、これはもう皆さんもよくご存知だと思うのですが、まあ、私たちの郷土であります高槻あるいは茨木の地にも三島古墳群という立派なものがございます。しかもそのなかには継体天皇、もしくは継体大王と呼ぶべきものでしょうが、そのお墓が含まれています。現在、継体陵は太田茶臼山古墳に比定されておりますが、考古学的にも、あるいは文献史家の多くの方々も、高槻にある今城塚古墳が真実の継体天皇陵だというふうに学問的な結論が一応あたえられております。いずれにしましても、今回、私が掘りました新池遺跡というのは、三島古墳群の中心部にあるんだという認識をしていただきたいと思います。

それで「埴廬」ですけれども、これは埴輪の「埴（ハニ）」と「廬（イオリ）」という文字がくっついているわけですが、「埴」というのは基本的には「赤い粘り気のある土」、辞書をひいていただければ載っておりますけれども、そういった字の意味合いがございます。「廬」というのは「いおり」ですね。粗末な家とか、そういうことなので、有名な「埴生の宿」という歌の文句がありますが、字句そのものの意味としては、「埴生の宿」と「埴廬」はほぼ同じような意味をもっているということなります。この「埴廬」はさきほどいいましたように、『日本書紀』の記述の順番からながめますと、どうも地名であったらしいと。ただ、国名・郡名ときますと、ふつう次は郷名がくるんですが、どうも郷名としての「埴廬」ということではないらしい。平安時代の『和名類聚抄』という書物、漢和辞典みたいな本ですけど、それをひもときましても、摂津の島下郡、あるいは島上郡の郷名一覧のなかには、「埴廬」というものはもちろんございません。だいたい「埴廬」というのは、そんなに広い範囲を示す単位の地名ではなかろうと、おそらく『日本書紀』の編者が認識していたのは、「かつて、ここで埴輪を焼いていたところ」あるいはもっとひらたく言えば、「埴土を出すところ」、そういった意味合いでの呼称があったのではないだろうかと思います。とにもかくにも、「埴廬」というのは、奈良時代にこの新池の近くの地名として残っていた、ということであります。

現在、この新池遺跡を中心とする一帯は「土室」といいます。「土室」の「土」はツチですが、これはニとも読みまして、「埴（ハニ）」に通じるものであります。


Ⅲ区
Ⅱ区
Ⅰ区
C群窯
B群窯
A群窯
3号
2号
1号
工房群
工人集落
田
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
0
50m

遺構平面図

「室（ムロ）」も基本的には「廬（イオリ）」と同じです。家であるとか一定の小さな地域をさすということで、これも現在のこっております「土室」という地名と『日本書紀』に記されております「埴廬」はまったく同じような字の意味合いをもつのだという、そういったことからでも「埴廬」というのは、新池周辺の土室地域をさしていると言えるかと思います。そして、その土室地域の一画を発掘すれば、埴輪を焼いた窯が出てきたということです。

まあ、答えからいいますと、これまでの発掘で確認しました埴輪の窯は18基でございます。遺構図をみていただきますと、左下の方に埴輪窯A群、その上にB群、C群と書いてあります。A群というのは5世紀中頃の埴輪窯で、3基ございます。B群というのは、これは5世紀後半の埴輪窯でありまして、現在5基確認されております。C群と申しますのは6世紀代の埴輪窯であります。考古学では、出てくる埴輪の調整の仕方でありますとか、焼き方でありますとか、形態などで序列をつけて、個々の埴輪の時期を相対的に決めていくわけですが、このC群の埴輪と高槻市の郡家の西にあります今城塚古墳の埴輪がまったく同じ手法、同じ調整、同じ形態なのであります。もっと端的に申しますと、新池遺跡から「舟」のヘラ記号が発見されておりまして、それと今城塚古墳で採集されました埴輪に同じ「舟」のマークが記されておりました。これを今風に言いますと、この「舟」のマークは「新池ブランド」のひとつだということになりましょうか。ただ新池遺跡から出てくるヘラ記号は「舟」だけではないのですが、少なくとも、その中に確実に「舟」のマークが含まれているということで、これはまさにC群の埴輪窯で焼かれた埴輪と、今城塚古墳から出てきた埴輪が同じ製品だということがいえるかと思います。ちょっと話がそれましたけども、新池遺跡ではA群・B群・C群合わせて18基の埴輪窯が5世紀中頃から6世紀中頃までのおよそ100年間にわたって断続的に営まれていたということであります。

それに加えまして、5世紀代の工房跡が3基検出されました。埴輪は粘土をひねりまして、形づくっていきます。いちばんポピュラーなものは、円筒形の埴輪であります。そのほか、家形でありますとか、あるいは盾とか甲冑などの武器類の埴輪をつくったりします。要するに埴輪製作の仕事場が工房になるわけです。そういったものが、今回発見されております。それもいまの段階では、日本で一番大きな規模を誇っていると思われます。私もこの発掘に入るまえにある程度そういったものの検出が予想できるということで、事前に若干の勉強はしたつもり

だったのですが、予想をはるかに上回る規模の工房跡が検出できたということで、非常に驚いているわけなんですが、ちょうどいまから一カ月ぐらい前に茨城県ですとか、埼玉県・群馬県などの遺跡をみてまいりました。あちらの方は戦前から埴輪の窯というのがたくさん調査されておりまして、そして群馬県本郷埴輪窯跡や茨城県馬渡埴輪製作跡など、そのいくつかのものが国の史跡として保存されております。それを勉強しなければと思って見に行ったのですけど、まあ小さいわけですね。当時の普通の竪穴住居が一辺4mから5m位の方形の浅い掘り込みのなかに屋根をかけて住むわけなんですが、関東の埴輪工房は基本的には、その形態を守っているというんですか、その程度の規模で埴輪をつくっているわけなんですね。ところが今回、新池遺跡で出てまいりました3号工房などは一辺が12.8mと10.7m、面積で言いますと137㎡ございます。だから関東でこれまで確認されております埴輪工房の4倍から5倍の床面積があります。これは非常に驚きなわけですが、それだけではなくて、普通の工房跡というのは4本の柱を建てまして、それに桁(けた)と梁(はり)を渡して屋根掛けするという簡単なものですけれども、あとでスライドでお目にかけますが、新池遺跡の場合は合計10本の柱で屋根を支えているということであります。しかも面積で4～5倍ですから、その屋根の大きさということになりますと、容積的には倍々になってまいりますから、そういった大屋根を支えるということで、それぞれの主柱は2本1組にした特殊な柱を用いていることが解ってまいりました。

また新池遺跡ではこれらの遺構に加えまして、いわゆる工人集落を検出しています。集落の在り方としましては普通のものと変わらないのですが、住居跡の中に埴輪のかけらがポコポコと出てくるわけなんですね。農業しながら生活しているといった集落遺跡でありますと、発掘しましても埴輪などは出てくるものではないのですが、これは工房跡と同じ丘陵の上にありますし、時期が同じで、しかも出てくる埴輪もまったく同じ種類だということで、埴輪生産に携わっていた人達がそこに住んでおったのだろう、というふうなことが考えられます。そうしますと、埴輪窯と工房跡と工人集落をセットで確認できたことになるわけです。これまで1年半以上の期間をかけて発掘しておりますが、やはり一度に掘るということの意味合いが非常に大きいんだなあということでありましょう。小規模な範囲を繰り返し繰り返し掘っていきますと、家が一軒出てきた、ハイまた出てきました、というかたちになって、なかなか全体像がつかめません。これを新池遺跡

の場合にあてはめますと、窯跡群の配置が判明するまえに工房跡を掘り切ってしまったり、あるいは埴輪窯の消滅後に工房跡を検出するということになりかねません。そうしますとこれらの遺構群が一度に展開している様子を目の当りにすることができなくなってしまいます。そういったことですので、大規模発掘は文化財の破壊という意味では非常に心苦しいんですけども、そこから出てくる事実をくみ取るうえでは非常に大きな成果があがってくるということが言えるだろうと思います。

今回は埴輪窯のＢ群・Ｃ群につきましては、それに伴います工房跡は検出できなかったのですが、５世紀中頃の埴輪窯Ａ群と工房跡と工人集落は、これはもう基本的にはセットであるわけで、これが新池遺跡にみる「埴廬」の実態だということができます。これをもう少し具体的にいいますと、「埴廬」の当初の姿というのは、埴輪窯３基・大規模な工房３棟・竪穴住居群からなっているということになります。住居群では14軒ほど検出しておりますが、重複しているのがございますので、計算しなおしますと、多分５軒から多くて７軒ぐらいの集落であっただろうと思われます。そして、それらが本来一つの目的のために埴輪を生産する、しかもその埴輪を畿内の大王陵級の古墳に供給しているシステムのひとつをこれだけの分量の遺構が示している、あらわしている、というふうに考えられるわけです。

新池の埴輪生産遺跡が一体どのような理由でこの地に成立したのかということになりますと、これは後々、お二方の先生も触れられるかとも思いますので、詳しくは述べませんけれども、おそらく三島古墳群の中央部にあります太田茶臼山古墳、これは全長220ｍを測ります大きな前方後円墳ですが、そこの埴輪を宮内庁あるいは茨木市の教育委員会が若干調査しておりまして、それらと見比べますと、どうもＡ群窯の埴輪が太田茶臼山古墳に供給されていただろうということが解ってまいりました。まあそういった太田茶臼山古墳の造営が契機となりまして、この新池遺跡が形成されたのだということであります。また新池の埴輪づくりはこのあと６世紀中頃まで続けられていたことも分っておりますが、あまり時間がございませんので、このあとは調査の成果をスライドで振り返ってみたいと思います。

スライド1

スライドー1

上方から左下へのびていますのが名神高速道路でありまして、左下にみえます古墳が太田茶臼山古墳、右にありますのが、継体大王の陵と考えております今城塚古墳であります。新池遺跡はやや左側の丘陵の上になるかと思います。手前の古墳が帆立貝式の番山古墳です。近年藤原鎌足の墓ではないかと再び騒がれております阿武山古墳がもう少し左側の山の上にあります。そしてその山麓一帯に後期の塚原古墳群がひろがっております。また新池遺跡のすぐ東にあります南平台丘陵には前期から中期にかけての弁天山古墳群があります。要するに、この三島古墳群の中心部に新池遺跡がある、というふうに理解していただいたら結構かと思います。

スライドー2

ちょうど新池遺跡を南の方からみたところであります。中央にみえます丘陵のほぼ全域が、今回の調査対象ということで発掘いたしました。だいたい30,000㎡の広さだと考えていただいたらよいかと思います。この丘陵は地質学でいうところの中位段丘に相当するものでして、標高は47ｍから62ｍであります。左側に池が２つ並んでいますが、手前の小さな方が、「新池」という農業用の溜池です。この池の東の斜面地でかつて埴輪片が採集されまして、遺跡の発見と報告があっ

たということです。

スライド2

スライドー3

これはＩ区の全景であります。ちょうど丘陵の東半分にあたりまして、左側が北、右側が南になります。ちょっと分かりにくいかも知れませんが、５世紀代の竪穴住居14棟のほか、７世紀から８世紀にかけての掘立柱建物を20棟ちかく検出しています。とくに竪穴住居群は南半部に集中して発見されまして、そのあたりから埴輪片や須恵器などが出土しています。この住居群を埴輪工人の集落と考えています。

スライド3

スライドー4

住居跡２を南側からみたところです。大部分が削平されていますので、状態はあまり良くありません。一辺約６ｍの方形のもので、床面にみえます４本の柱を中心にして、屋根を支えています。また壁際に沿って溝がめぐっているのが分かるかと思います。新池遺跡ではこうした形態の竪穴住居をＡタイプと呼んでいま

スライド4

スライド5

スライド6

スライド7

スライド8

す。また右の手前に簡単なつくりのカマドがみえます。

スライドー5

これは住居跡3を南側からみたものです。この住居跡は一辺4mあまりで、少し小さいものです。床面には柱穴もありませんし、周囲の溝もありません。ここではBタイプの住居跡と呼んでいます。なおこの住居跡3からは東海地方の台付甕が出土していまして、興味をひきます。

スライドー6

住居跡15を西側から撮ったものです。長辺が5m、短い辺が4.2mで、やや長方形になっています。柱は中軸線のところに2本みえています。また東のほうには周溝もわずかにみられます。これをCタイプと呼んでいます。新池遺跡でこの工人集落を全部掘り切っていますので、タイプ別に数えますとAが8軒、Bが6軒（このうちの1軒は新しい）、Cが1軒となります。ただ遺構図に示していますように、住居跡同士が重複しているのがありますので、これらを整理しますと、さきほど申しましたような5軒から7軒の住居からなるこの工人集落が5世紀中頃から後半にかけての時期に、2度にわたって営まれていたことが考えられます。

スライドー7

これは住居跡2のカマドを断ち割って調査しているところです。焼け土の層が上下2段になっているのと、それぞれの上面に

壊れた甕が見えるかと思いますが、これは一度つくり変えられた事を示しています。真ん中にある石は２回目のカマドに設置されていた台石です。

スライドー８

これは住居跡14で検出したカマドです。台石のうえに甕がそのまま据わっているのが分かります。ちょっと珍しい写真だと思いまして、お目にかけました。

スライドー９

Ⅱ区の航空写真であります。Ⅰ区の西隣で、ちょうど「新池」との間です。Ⅰ区と同じように左が北、右が南です。右端の斜面地にみえますのがＡ群の埴輪窯で、丘陵のうえには工房跡が３棟、整然と並んでおります。右から左へ１号・２号・３号と呼んでいます。３号工房の左下にあるのは６世紀後半の横穴式石室をもつ直径約10ｍの古墳です。また「新池」の岸に沿って溝状の白線が何本もみられますが、これは発掘しておりませんけど、Ｂ群窯と呼んでいる埴輪窯とＣ群窯と呼んでいる埴輪窯であります。３号工房の東には梁行３間・桁行７間の大規模な掘立柱建物がみえます。この建物は７世紀後半以降のものです。

スライド９

スライドー10

Ａ群窯を正面から撮ったところでありまして、３基がほぼ平行して並んでおります。右から１号窯・２号窯・３号窯となります。いずれも窯の上端の煙り出しは削られてなくなっていますが、いまのこっている部分だけでも７ｍから８ｍございます。本来は10ｍぐらいあっただろうと考えられます。また１号窯と２号窯

スライド10

では焚き口付近に段差がみられますが、遺構の観察の結果、これは窯の廃絶後に起こった地震による地滑りの跡と考えられています。その両端にみられる遺構は排水溝です。埴輪を焼きますのに800度から900度ぐらいに温度をあげますので、雨水の処理とか湿気を防ぐために、設定されていたものです。窯と同様にうえの方が削られておりますが、本来は3基の窯を取り囲むために、「コ」字状につながっていたとみて間違いないでしょう。

スライドー11

2号の埴輪窯です。ふつう発掘しますと皆さんにお目にかけますのは、最終的に掘り切ってしまってからどうぞ見てくださいということになりますが、これは調査途中の写真であります。本来はこの検出面のうえに腐食土が流れ込んでおりまして、それを丹念にとり除いた後の天井が崩落した状態の様子を撮ったものであります。そして、この天井材を調べていきますと、なかに藁くずの痕跡がたくさん検出されました。藁くずが認められたということは、どういうことかといいますと、窯の天井は土壁のようにつくっていたといえるわけであります。埴輪窯の構造には、斜面地をまったくトンネルのように刳りぬいて築く地下式と、斜面地を樋状に掘りまして、天井だけを架構する半地下式があるのですが、A群は3基とも半地下式であったと考えられます。

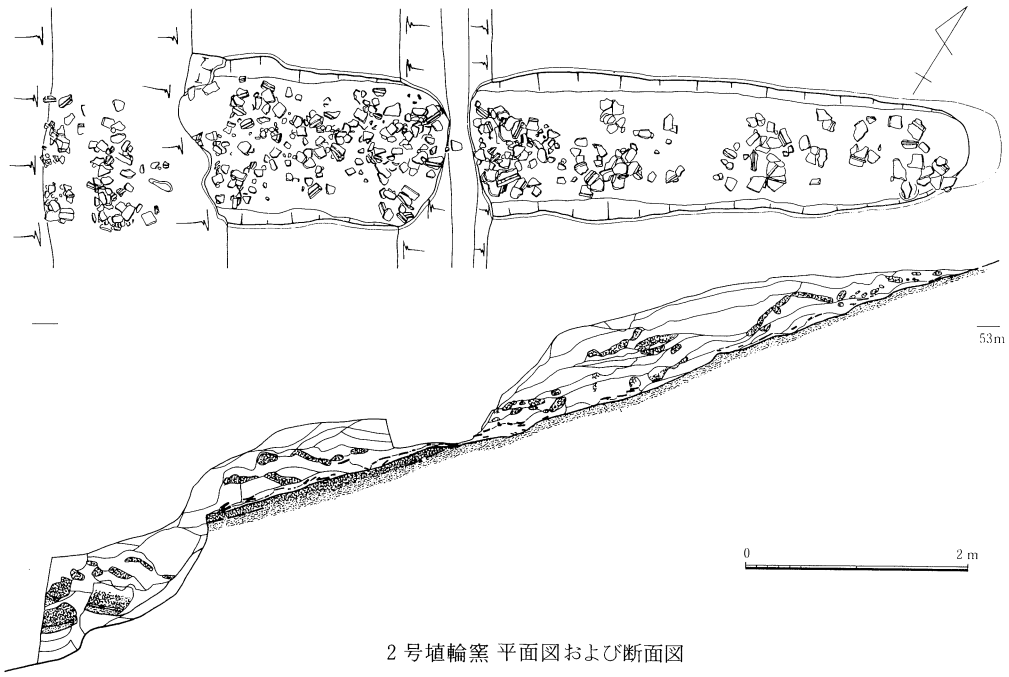
スライドー12

これも2号窯で、崩落した天井材を全部取り除いて、床面を検出したところであります。窯の幅は1.4mで、長さの割りには狭く、全体の形としてはスリムな

スライド11

スライド12

印象をうけます。床面は基本的に１枚と考えられまして、厚く堆積した焼土層からはたくさんの埴輪が小さなかけらになって出てまいりました。本来、円筒形の埴輪とか、形象埴輪などは傾斜した床面に立て並べて焼くのですが、出てくる埴輪片のほとんどは、焼台などの窯詰めの用具として２次使用されていたものとみています。最終的には整理してみないとわからないんですが、あまり接合できないだろう、と私は考えております。また床面とか壁面とかの色を見ていただいたらわかるのですが、まったく埴輪と同じ赤っぽい色をしています。須恵器といって、この時期に朝鮮半島の方から新たな技術が入ってきてつくられた土器がありますが、それを焼く窯は全部黒っぽい灰色で極めて堅く焼きしまっています。須恵器も埴輪も同じような登り窯、正式には窖窯（アナガマ）と言いますが、まあそれで焼くわけです。ところが埴輪の場合は、その当初から赤く焼くということ



2 号埴輪窯 平面図および断面図

がやはり大きな使命としてあったようで、工夫すればいくらでも固く焼けるのですが、どうもこのＡ群窯をみている限りでは、須恵質に焼きしまった灰色の埴輪というのは、彼らの目ざすところではなかったように思われます。

スライドー13

これはＢ群窯とＣ群窯の検出状況で、北側から撮ったものです。奥にみえますのがＢ群窯で、５世紀後半の埴輪窯が５基あります。手前がＣ群窯で、６世紀の埴輪窯を10基確認しています。またＢ群窯には全長が15ｍ以上のものがありますし、Ｂ群窯のなかにも12ｍ以上のものが数基みられます。このＢ・Ｃ群窯につきましては本格的な調査はおこなっていませんが、トレンチ調査の結果から判断いたしますと、どうも地下式であったと思われます。ですからＡ群とＢ・Ｃ群とでは立地する場所も違えば、どうも窯の構造も違うし、時期も違うということになります。したがいまして、新池遺跡の埴輪窯はまず最初に谷の入り口につくり、時期が新しくなるにつれて、谷の奥の方へ順に移っていくというようなかたちで、窯跡群の変遷がみられます。さきほど関東の話をしましたけれども、あっちの方は全長で４ｍから６ｍ程度のものが圧倒的に多く、どうもその程度のものが平均的な規模であったようです。そうしますと新池の埴輪窯はえらい大きいんだなあ、とあらためて認識した次第であります。

スライド13

スライド14

スライドー14

これはC群窯のもっとも北にあります18号窯の灰原(はいばら)の一部を調査したもので、東側から撮っています。手前の方に谷がのびていまして、そこに流れ込んだ状態で埴輪がぎっしりと折り重なって検出されました。これはすべて今城塚古墳とほぼ同時期の、6世紀前半の埴輪であります。

スライドー15

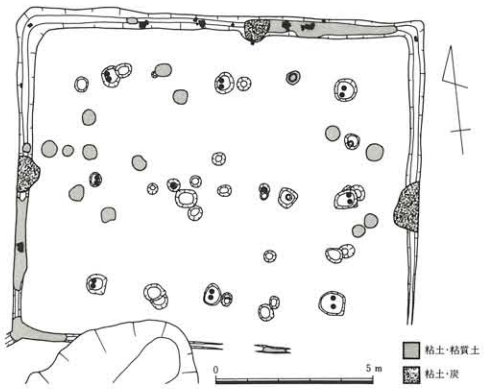
これは3号工房跡で、南から撮っています。いま人が立っていますのは主柱のところで、いわば8本の柱を表現しています。そのほかにも、この中軸線上に2カ所の棟持柱があります。人が並んでいる状態で、だいたいの大きさが分かっていただけると思いますが、これが、さきほどもいいましたように、日本で最大の埴輪工房で、東西が12.8m、南北が10.7mあります。右下の人の前にある柱穴を見てもらったらいいのですが、2つの柱の痕が認められます。あとでまた大きく写した写真をお目にかけますが、両端に位置します棟持柱とすべての側柱に、そういった2本を1組にした特殊な柱を埋め込んでおります。建物の骨組としましては、これらの柱の上に横材を架けますが、とくに棟の方向に平行するものを桁、直交するものを梁といいます。これらの2つの穴は桁に対して必ず直交しており

スライド15

ます。具体的に申しますと、３号工房は東西方向に棟をもっておりますので、２つの柱穴はすべて南北に接して並んでいるわけです。それに対しまして１号と２号の工房は南北に長辺がくるというように建てられておりまして、この２本１組の柱の痕は例外なく東西方向に並んでおりました。要するに、この特殊な柱の上に桁や棟木を架けやすくするための配置になっているということでしょう。しかも妻側の柱の痕を直線でむすびますと真ん中の柱の痕が外側にわずかに突出してまいります。これは梁を架けてからその外側に棟持ち用の柱を立てていると思われます。そうしますと梁筋よりも棟が外にでてきますので、おそらく入母屋式の構造に復元できるだろうと考えられます。つぎに床面を見ていただきますと、たくさん穴があいております。その中に埴輪が突っ立っていたり、粘土が入っているものがありまして、作業用のピットとみられます。これについてはあとで触れたいと思います。

スライド－16

これが２本１組になった柱の痕であります。我々の常識でありますと、まずこうした状況では、柱を立て替えたのだろう、屋根を葺き替えたのだろう、というような発想になります。けれども３つの工房跡のすべての側柱に２つずつの柱の痕があるということと、それぞれが明確に重なり合っておらず、しかもその配置に規則性があること、各工房の周溝が１本しかなく建て替えた痕跡がみられないことなどから考えますと、当初から２本ずつ柱を立てていたのは間違いのないと



3号工房跡平面図

スライド16

ころだと思われます。

スライドー17

これは1号工房を東側から撮ったものです。竪穴の中に埴輪がゴロゴロと転がっておるという状態で出てまいりました。床面のところどころに柱穴より若干浅い穴がいくつもあいているのがみえるかと思います。この中には粘土あるいは埴輪のかけらが入っております。どうもこういったものは、作業用のピットだろうと思われます。おそらく、このすぐそばで粘土をひねりながら埴輪をつくっていたと考えられます。そして余った粘土をこの穴に入れたり、あるいはこの穴の中に入っていた粘土を補助材として接合面などに塗り付けたりしていたのでしょう。さきほど話しました柱を立てる穴は深さが70cmから80cmほどありまして、大きな屋根を支えるために深く掘っていますが、作業用のピットは直径が40cmから50cm、深さはだいたい20cm～30cmで、むやみに深く掘っておりません。こうした作業用ピットは各工房で10数カ所ずつ検出しています。また床面や周溝のなかに白いものがありますが、これらは、周溝に横たわっている円筒埴輪と同様、最終的に棄てられて放置されたものです。

スライド17

スライド18

スライド－18

これは３号工房の作業用ピットのひとつです。なかに立っています円筒埴輪は容器の一種として利用されているものでして、かならず上下のどちらかが欠けていたり、なかには両方とも欠けたものがあります。これらは窯で焼き損なった円筒埴輪のなかから、胴まわりの完全なものだけを選んで工房に持ち込んだものであります。そしてこの中に粘土あるいは粘質土といいますか、粘土に砂を混ぜたものが入っております。

スライド19

スライド20

スライド－19

これも３号工房から検出されたもので、やはり円筒埴輪が出土しています。これらの破片は全部接合できまして、さきほどお見せしましたスライドの埴輪とよく似た大きさに復元できました。

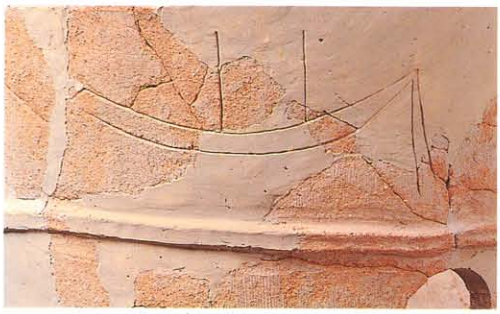
スライド－20

これは１号工房の作業用ピットのひとつです。このピットには埴輪を用いた痕跡はみられないんですが、粘土がびっしりと詰まっている様子がよくわかると思います。

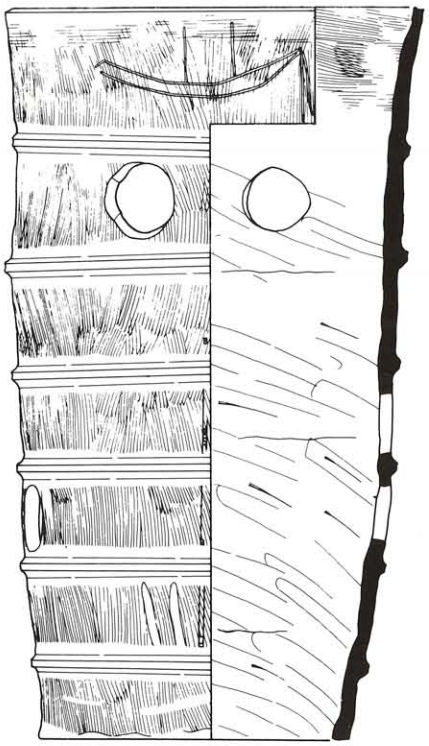
スライド－21

これは「新池」の南側の谷部の調査区で検出した井戸です。円筒埴輪は本来古墳に立て並べるものなのですけれども、ここではそれを井戸枠に転用しております。内側の埴輪が本来の井筒として使用していたもので、外側の割れている埴輪はおそらく穴をふさぐためとか、補強の意味合いがあったと思います。その中のほうの埴輪に、ヘラ描きの「舟」のマークが入っておりまして、それが今城塚古墳のものと同じだということです。さきほどの工房跡とか埴輪窯は５世紀の遺構ですが、この井戸は６世紀の埴輪を用いておりまして、若干新しいものです。丘陵部には５世紀の工房はございますが、６世紀の工房はみられません。６世紀の

スライド21



舟形のヘラ記号



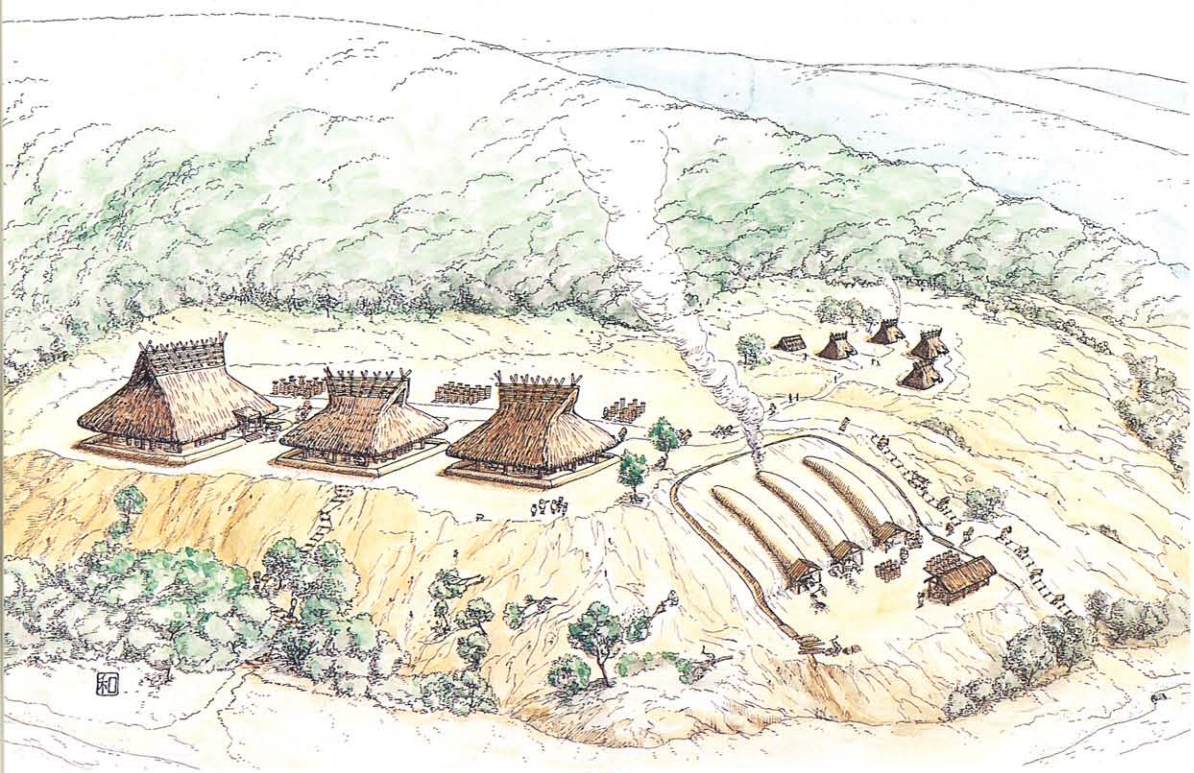
井筒に用いられた円筒埴輪（1/8）

工房はどうも谷の方へ移っていったのではないかと推測されます。

スライドー22

これは新池遺跡の調査結果をもとに、『日本書紀』に記されております「埴廬」を復元したものであります。全体を西方上空から見下ろした恰好になっています。右下に描かれていますのが、A群の3基の窯になります。半地下式のイメージがうまく表れているでしょうか。丘陵のうえに並んでいる大きな建物は工房で、右から1号・2号・3号となります。3号工房だけ棟の方向が違い、規模も若干大きく、ほかの2棟を従えているようであります。図には工房の手前の斜面に窯は描いていませんけれども、発掘の結果では、ここにあと15基の窯が並びます。しかしこの復元画はあくまでも5世紀中頃の時点での「埴廬」であると理解してください。右上の竪穴住居群はI区で検出した工人集落の様子を描いています。

工房の東側に埴輪を立て並べてありますけれども、おそらくここに乾し場がありまして、その近くにはタタラみたいに粘土を積み上げておくような場所もあっただろうと思われます。そして乾燥した埴輪は広場から浅い谷筋をくだって東のほうから窯場に持ち込まれたものと考えています。焼きあがった埴輪は谷道をた



スライド22

どりまして、南西約１㎞のところにある築造中の太田茶臼山古墳に運び出していただろうとみられます。ただこの大規模な工房で埴輪をつくり、３基の窯を効率よく操業させようとすると、東側にみられる工人集落の規模では小さすぎるように思われます。だから、そのためには近くにあります土室遺跡でありますとか、ツゲノ遺跡などの集落からたくさんの人達が徴用されていたものと思われます。私はこの工人集落にいた人々は直接埴輪製作に携わる専門工人だと考えていまして、工人の住居から発見されました東海地方の台付甕などはその延長線上で理解しています。 このような埴輪生産のありかたをみますと、新池遺跡にみられる「埴廬」というのは、まさに官営埴輪工房であったと結論づけられるわけです。

今日はもう時間がありませんので一応これで私の話を終ります。～拍手～

司　会

どうも森田さんありがとうございました。

新池遺跡は大規模に発掘したということで、いろいろなことが分かりました。現在、大阪府下に埴輪の窯跡は数カ所しか分かっていないのですが、今回の新池遺跡といいますのは掘った面積も広いですし、窯跡も工房跡も、工人が住んでいた住居跡も全部明らかになったわけであります。とくに新池遺跡の場合は埴輪を供給している古墳もいくつか分かっておりますので、大きな成果になると思いま

す。

つぎに和田晴吾先生をご紹介させていただきます。和田先生は京都大学で考古学を専攻されまして、以前は富山大学に勤務されていたのですが、現在は立命館大学で考古学の講座を担当されておられます。なかでも古墳時代が専門の先生でございます。今日は「古墳祭祀と埴輪」ということで、ご講演をいただきます。それではよろしくお願いします。～拍手～

「古墳祭祀と埴輪」

立命館大学助教授　和田　晴吾

ただいまご紹介いただきました和田晴吾と申します。本日のテーマは、新池遺跡の調査を契機に、埴輪に関するいろいろな問題をみんなで考えてみようということでありまして、私は「古墳祭祀と埴輪」ということで話をさせていただくことになっています。しかしながら、この問題は、まともに取り上げますと非常にむずかしく、とうてい私の手に負えるものではありません。古墳祭祀と埴輪と言いますと、どうしても当時の人たちの生死観というか、死後の世界観と深く結びついたものであります。ところが、考古学は遺物や遺構といった「もの」を基本的な資料としていますので、どうしても精神的なもの、観念的なものの分野が不得意といわざるをえません。そこで、ここでは、古墳祭祀の実態やその意義、あるいは埴輪の意義を考えるために、少し遠回しではありますが、古墳の築造過程をはじめとして、古墳という場でおこなわれた人々の行為をできるだけ細かく具体的に追及し、そのなかから、それぞれの行為の意味を考えるという手続きをとりたいと思います。したがいまして、今回の話のまず最初は、埴輪を製作し樹立するということの意味を、古墳という場を媒介としておこなわれた一連の行為のなかで考えてみようということであります。

現在、立命館大学では、毎年夏休みに、京都府の丹後の加悦町で鳴谷東1号墳という古墳を掘っていますが、その発掘の重要なテーマの一つが、やはり、古墳のつくり始めから終わりまで人々はどういう行為をどのような手順でおこなったのか、ということであります。まだまだ分からないことだらけですが、今日はその成果も踏まえて、考えているところを話させていただき、少しでも責任を果せればと思っています。

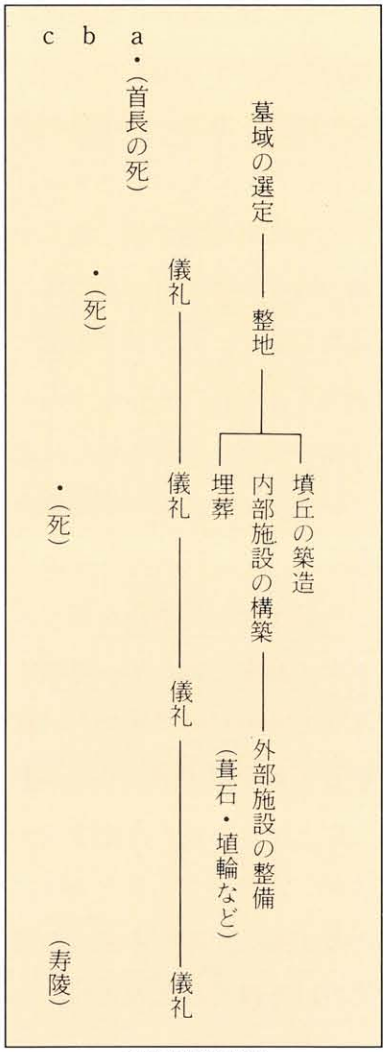
そこで、まず、古墳祭祀とはどういうものかということですが、それは第一に、

亡くなりました地域の首長の霊を祀(まつ)ることであると考えられます。しかし、ただそれだけではない。新しいつぎの首長が、亡くなった首長から霊威を継承し、新しい権威をわがものとする、首長権継承儀礼の祭祀ではなかったか、と多くの研究者は考えています。しかし、その祭祀の実態を把握することは、さきにも述べましたように、なかなか容易ではありません。ですから、ここで古墳祭祀と言いました場合は、それよりももっと具体的なところで、古墳をつくる土地を選び、整地して墳丘を築き、遺体を埋葬し、というような古墳という場でおこなわれた一連の行為の全体を指すことにしたいと思います。と言いますのも、そのような行為の一つ一つが一定の習慣や約束にしたがっておこなわれたと考えられるからであります。土を盛り、葺石(ふきいし)をふき、埴輪を立てるといった行為の全体が、一つの体系的な儀礼的行為であったと考えられるわけです。そして、その習慣や約束は、古墳に葬られた人の生前における地域での地位やヤマト政権との関係の仕方、あるいは他地域の首長との関係などによってさまざまなかたちがあり、なかなか複雑なのですが、当時の人たちはどこの誰が死ねばどういうかたちで葬られるかをはっきりと認識し、それを了解していたはずなのです。ですから、古墳という遺跡は、そうした一定の約束にもとづいた人々の一連の儀礼的行為が整合的に蓄積され、眠っているところということができるかと思います。

ところで、発掘調査と言いましたら、普通は、マスコミなどをみましても、金ピカのすばらしいものが発見されたとか、最古のものが出てきたとか、発見された個別の遺物や遺構を非常に高く評価することが多いわけであります。しかし、発掘に方法論があって、専門の担当者がいるというのは、単に遺物や遺構を検出するだけではなく、それらに関連する情報、たとえば当時の人々がどのような手順でそれをつくったのか、あるいはそれをどういうふうに使ったのかといった情報をどれだけ引っ張り出せるかが問題だからであります。そういう点からしますと、幸いなことに、古墳の場合は、先に述べましたように、その場でおこなわれた人々の行為のほとんどが一定の約束のもとにおこなわれたと考えられますので、集落遺跡などよりははるかに偶然性の入り込む余地が少ないわけです。ですから、今後、調査の精度がますます高くなってきますと、古墳で実修された人々の行為を、一連のものとして、よりよく把握することができると考えられます。

さて、具体的な話に入りますと、25頁に古墳の築造過程というのが書いてあります。これを参考にして、みなさんお一人お一人が頭のなかで古墳をつくってい

ただければありがたいのですが、少しおおざっぱに順番を考えてみましょう。まず、どこに古墳をつくるかを決定する。場所がきまりましたら、木や草を取り除き、土地を整える。そして、そこに墳丘を築き、内部施設を構築し、遺体を納める。その後に葺石をほどこし、埴輪を樹立する。だいたいこのような手順が考えられます。しかし、実際のところは、たとえば、いつ葺石がふかれ、いつ埴輪が立てられたかも十分わかってはいないのです。後円部の頂上にある方形埴輪列のような場合は、内部施設の上に立てられていますので、埋葬がおわってから立てられたことは明らかなのですが、墳丘外縁の平坦部や裾部のものはどうか、内部施設が複数ある場合はどうかなど、問題はいくつも残されています。



古墳の築造過程

また、その左横には4カ所に儀礼と書いています。これはどういうことかと言いますと、発掘をしていますと、途中で土器が出てきたり、土が焼けていたり、灰が出てきたりします。しかも、出てくる場所や土器の取り扱い方に一定の約束があります。したがって、それらはきっと、土器を用いたり火を使ったりして、何らかの儀礼をした跡なんだろうと思われます。墳丘が築かれる前の段階、これはい

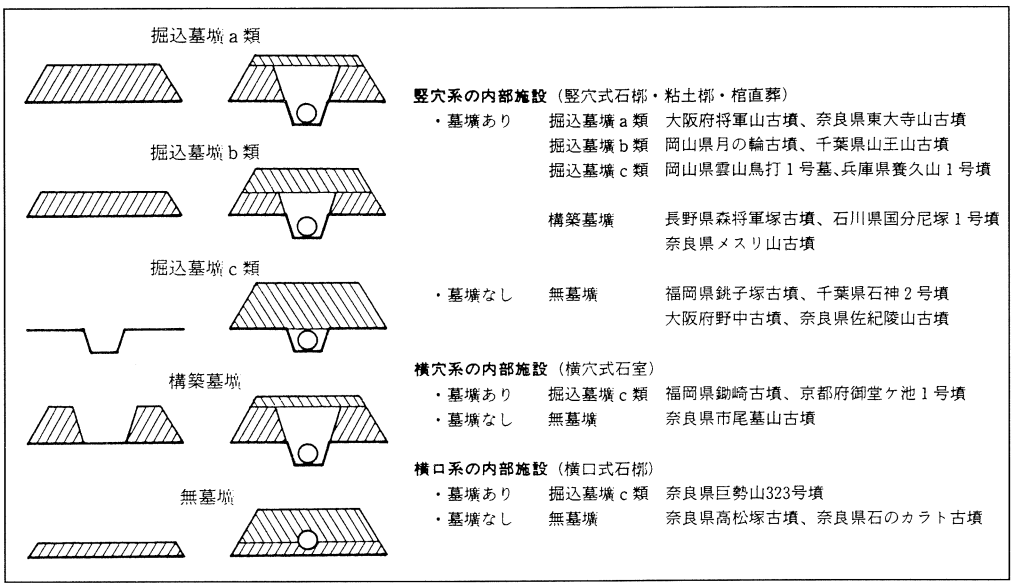
埴輪列と供献土器（鴨谷東1号墳）

までいう地鎮祭的なものかと思われます。つぎは墳丘を築き、内部施設をつくり、遺体を埋葬する過程のもの。この間は１度とは限りません。そして、埋葬がおわった段階、あるいは埴輪の樹立されてしまった段階でのものです。墳頂部でおこなわれるものもありますし、墳丘の裾でおこなわれるものもあります。

さきほどの図では、墳丘の築造と内部施設の構築と遺体の埋葬の３つが並べて書かれていますが、じつはこの３つの行為は古墳によりまして手順がすこしずつ異なります。そこで下の図に５つの場合を示しておきましたが、墓穴である墓壙（ぼこう）をつくるのかつくらないのか、墓壙は掘るのかそれとも築くのか、また掘る場合にはいつそれを掘るのかによりまして、いくつかに分けられます。上から順にみていきますと墓壙を掘る場合には、墳丘を完全につくってからあらためて墓壙を掘るタイプ、墳丘を築く途中で墓壙を掘るタイプ、墓壙を掘って埋葬をすませてから盛土をして墳丘を築くタイプの３タイプがあります。

また、墓壙を掘らず、墓壙になる部分のまわりに土を積んでそれで墓壙を築くタイプのものがありますし、墓壙をもたないで盛土の途中に棺を置いてさらに盛土をしていくタイプのものがあります。

以上は、おもに古墳時代前・中期の竪穴系の埋葬施設の場合を想定したものですが、古墳をつくると一口にいいましてもその過程にはさまざまなものがあり、作業手順もかなり多様であることがお分かりいただけるかと思います。しかし、それは多様ではありましても、けっして無秩序であったのではなく、ある時期の



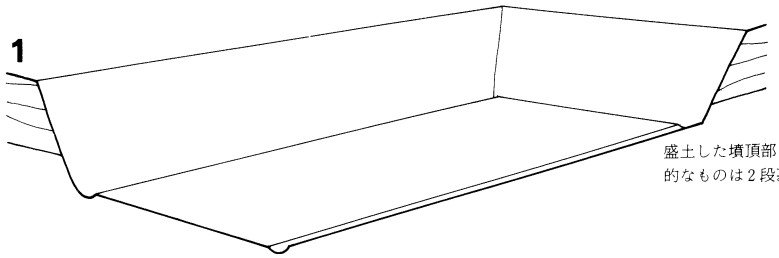
墓壙の諸類型『古代史復元』６より

ある地域の人々は、一定の約束のもとに、おもにその社会的・政治的位置に応じて自らの古墳をつくっていたと考えられるのでありまして、その約束の原理を解明できれば、古墳時代の理解に大きな貢献をすることができるのではないかと思われます。

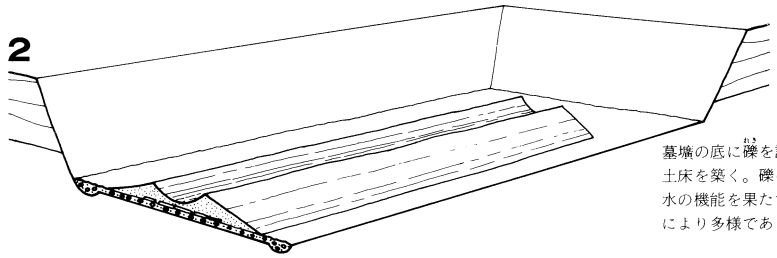
竪穴式石槨と粘土槨（弁天山C１号墳）

ところで、畿内の前期・中期の主要な古墳では、いちばん上にあります「掘込墓壙ａ類」、すなわち、墳丘を完全につくってしまってから、あらためて墓壙を掘るタイプのものを採用しています。そのころの代表的な内部施設は竪穴式石室、私はこれをその本来の機能にあわせて竪穴式石槨と呼んでいますが、それを例にとってその手順を説明しますと、28頁のようになります。完成している墳丘の頂部に墓壙を掘り（墓壙はしばしば２段になっていますが）、棺を置く粘土の台である粘土床をつくり、棺の身を安置し、石槨を棺の身の高さぐらいにまで積み上げます。後の３者は順番が入れ代わることもありますが、この段階では上から３番目の段階が埋葬儀礼のクライマックスの舞台になるものと考えられます。この場で遺体を棺に納め、副葬品を手順にしたがって棺の内外に配置するというような行為がおこなわれます。ここでは、もっと多くのことが執りおこなわれた可能性もありますが、現状では十分明らかではありません。そして、棺の蓋をし、時に一部の副葬品を棺の蓋の上などに並べ、石槨を完成し、墓壙を埋め戻します。後でふたたび触れますが、これらの行為を通して、遺体が非常に丹念に保護され、密封されることに注意しておいてください。

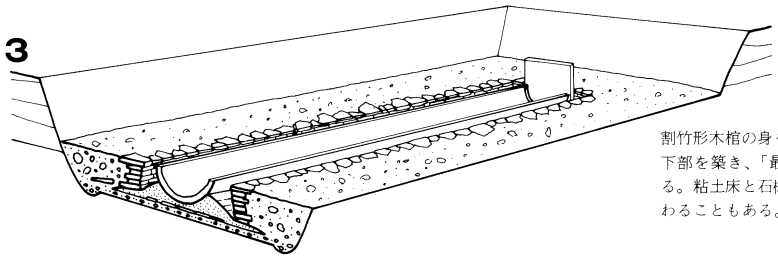
さて、以上のような場合ですと、墳丘を築造するという行為と、墓壙を掘り内部施設を営み遺体を安置するといった行為は連続していなくてもよい、そこに時間的空白期間があってもよいということができます。しかし、つぎの「掘込墓壙ｂ・ｃ類」や「構築墓壙」、「無墓壙」といったものの場合は、墳丘をつくる行為と、内部施設を営み遺体を埋葬する行為とは不可分に結びついており、それらは一連の行為として途切れることなくおこなわれたものと推定されます。したがって、後者のような例も少なくないなかで、畿内の主要な古墳があえて前者のような手順をとっていることに意義を見いだしたいわけであります。古墳は首長が死



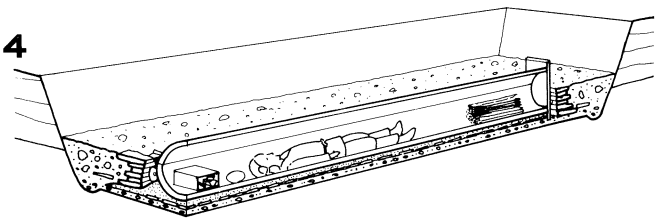
盛土した墳頂部より墓壙を掘り込む。本格的なものは2段墓壙をなす。



墓壙の底に礫を詰め、板石を敷いた上に粘土床を築く。礫は四周の溝とあいまって排水の機能を果たす。石槨の下部構造は古墳により多様である。

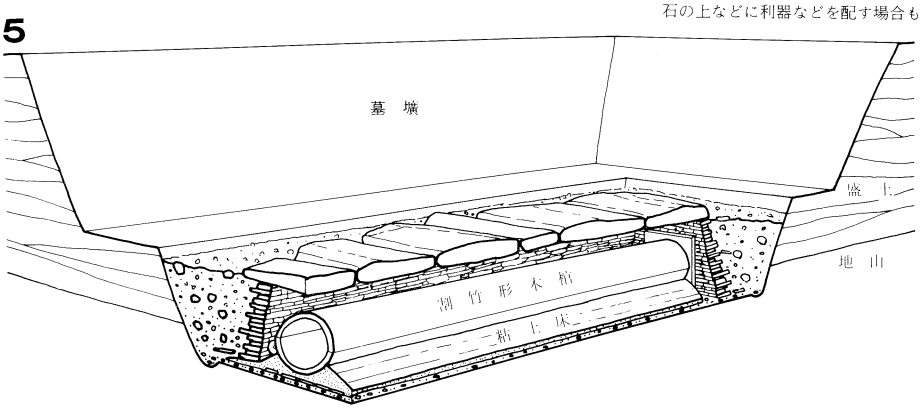


割竹形木棺の身を固定し、まわりに石槨の下部を築き、「最終的な埋葬の場」を整える。粘土床と石槨下部の構築手順が入れ代わることもある。



遺体を納め副葬品を配し、棺の蓋をする。副葬品は棺の内外に一定の約束のもとに配されたと考えられる。棺や石槨の内部などには赤色顔料が塗布される。

石槨の上部を築き、天井石を架ける。入念なものはこの上に粘土や礫を敷く。そして、墓壙を埋めもどす。時に粘土床の中や天井石の上などに利器などを配す場合もある。



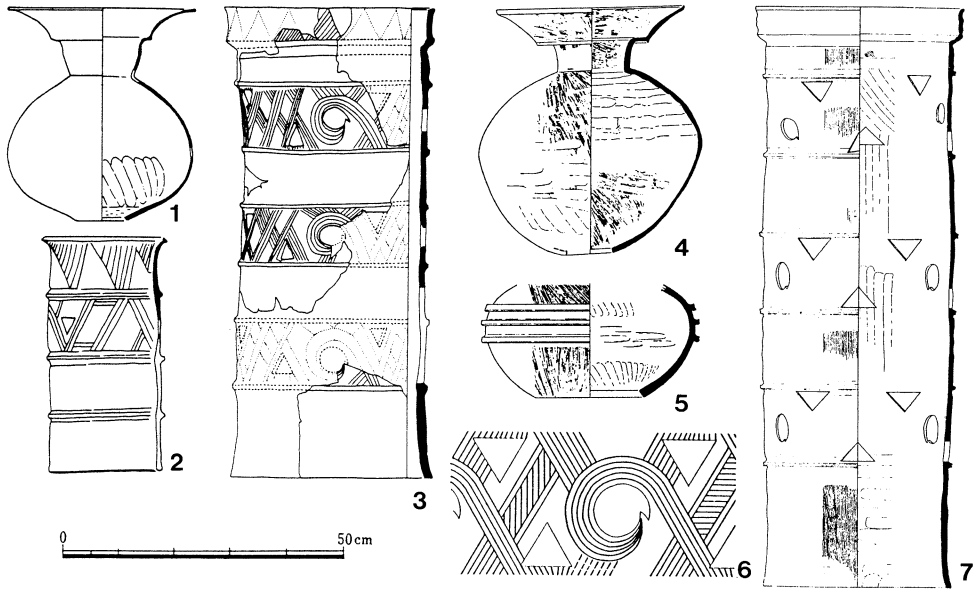
竪穴式石槨の構築過程（『古代史復元』6より）

んでからつくられたとは限らないわけでありまして、中国の皇帝のように、特定の地位につくと生前において自らの墳墓を築くという場合もあるのです。それは「寿陵」と呼ばれていますが、古墳の場合では、「掘込墓壙ａ類」においてのみ合理的に可能なわけであります。27頁の図の左端の３カ所に首長の死と書いてあるｃの場合にあたります。したがって、主要な古墳が寿陵としてつくられたかどうかで、その祭祀の意味も大きく違ってくるものと思われます。現状では明確に結論を述べることはできませんが、古墳祭祀の手続きがもつ一つの大きな問題としてとりあげた次第です。ちなみに、「掘込墓壙ａ類」とその他の、とくに「掘込墓壙ｂ・ｃ類」や「無墓壙」との差は階層性を内包したかたちでの中央と地方との差、と言えるかと考えています。前者の方が古墳的・畿内的、あるいは王権的なものと言うことができるのです。

さて、埴輪に問題を移しますと、埴輪はこうした一連の行為のいちばん最後にちかい段階に登場してくるもので、それを使って何かをしたというものではなく、墳丘のまわりに立てめぐらされたり、墳頂部に据えつけられたりしたものです。この点が埴輪の性格を考える前提となります。

つぎに埴輪にはどのようなものがあるかをみてみますと、円筒埴輪や朝顔形埴輪、家形埴輪、蓋・盾・靫・甲冑などといった器財形埴輪、鶏形埴輪、水鳥形埴輪、馬・鹿などといった動物形埴輪、そして巫女や武人をあらわした人物埴輪などがあります。しかし、それらは最初からすべてがそろっていたわけではなく、徐々に加わってきたものが多いのです。

そこで埴輪の消長といったところを簡単に説明させていただきますと、まず、最初に前方後円墳が成立してきた段階では普通にいうところの埴輪はありませんでした。30頁の図は、最古の前方後円墳の一つとして有名な奈良県の箸墓古墳から出土している、埴輪の祖形となるものですが、それらは特殊壺形埴輪や特殊器台形埴輪と呼ばれています。そして、そのもとになりますものは、現在の岡山県から広島県東部にあたる吉備地方を中心とした地域で弥生時代後期から終末期にかけて発達した、埋葬儀礼用の特殊な壺やそれをのせる器台であったことが明らかにされてきています。箸墓古墳ではそれらが後円部や前方部の頂上に置かれていましたし、京都府の元稲荷古墳では前方部のうえに方形に密集して置かれていました。これが古墳時代前期初頭の段階としますと、それらに由来するふつうの円筒埴輪が墳丘をめぐるようにして樹立されるのはつぎの前期前葉ということが



特殊壷形・器台形埴輪　1～3岡山県月坂1号墳　4～6奈良県箸墓古墳　7京都府元稲荷古墳

できます。そして、この段階から前期中葉にかけて朝顔形や鶏、水鳥、あるいは家・盾・蓋といった器財形埴輪が出現し、すこし遅れてそのほかの器財形埴輪が整ってきます。埴輪としてはよく知られている人物形埴輪や動物形埴輪が登場してくるのは古墳時代も中期中葉になってのことなのです。やがて後期に入りますと、埴輪は徐々に衰退し、後期後葉にはもうほとんどみられなくなります。ですから、埴輪と言いましても時期によって差異があるわけですが、そのもっとも大きな画期は人物や動物形埴輪の出現にあるのではないかと思われます。したがいまして、埴輪の性格や意義を考えます場合は、それらの出現前と出現後とを区別し、それぞれを埴輪群として考える必要があるかと思われます。

では、その前半期の埴輪をすこし検討してみましょう。埴輪はその種類によって配置される場所がほぼきまっています。円筒埴輪は墳頂部や墳丘の段の平坦面、あるいは墳丘裾において、めぐるように立て並べられます。朝顔形埴輪はこの円筒埴輪列の中に一定間隔で配置されます。その他の埴輪はおもに墳頂部あるいは造出に置かれますが、蓋や盾・靫をはじめとする武具形の埴輪は、しばしば内部施設のうえでこれを囲むように配された方形埴輪列の一部として立てられています。

このように、古墳祭祀の最後にちかい段階で配置された、このような種類の埴輪の性格はどのように理解したらいいのでしょう。

埴輪列（鴨谷１号墳）

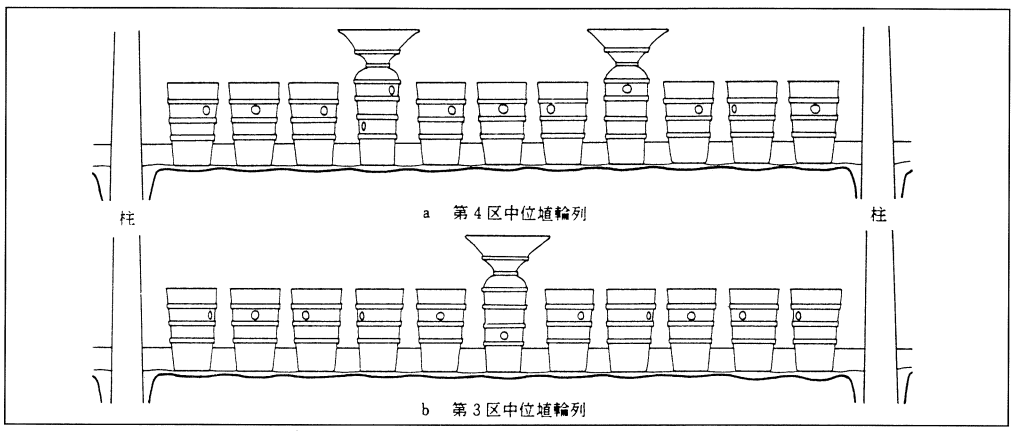
そこで、思い出されますのは、さきに述べました竪穴式石槨であります。本来、「槨」といいますのは遺体を納めた「棺」を保護する施設であるわけですが、これは弥生時代の日本列島にはみられなかったものでありまして、弥生時代の終末期に出現し、古墳時代前・中期に発達したものであります。すなわち、古墳の成立には中国からの強い政治的・文化的影響のあったことが指摘できますが、葬制の面での中国からの顕著な影響のひとつがこの「槨」なのであります。そして、この「槨」が示している葬制上の思想とは、遺体を邪悪なものからまもる「辟邪（へきじゃ）の思想」とでも言うべきものであったと推定されるのです。ですから、竪穴式石槨は非常に綿密につくられていますし、しばしば棺や槨の内面には赤色の顔料が塗られ、天井石は粘土で覆われ、ところどころに鉄の利器が配されているわけです。前期古墳の副葬品といいましたら鏡がよく知られていますが、この鏡も多くの場合は姿をうつす面を外に向けて置かれています。邪悪なものは曖昧な朦朧としたものとされていますが、鏡はそれらをはっきりと映しだし、その正体をあばくことから、邪悪なものを退ける力があると考えられていたのです。

古墳の内部には、このように、神聖な遺体を邪悪なものからまもるための施設や装置が何重にも何重にも備えつけられていたのです。ですから、埴輪が何重にも内部施設や墳丘を取り巻いて配置されているのも、じつは、邪悪なものが墳丘のなかに侵入するのを防ぐ装置の一環としてあったのではないかと考えられま

す。古墳をめぐる埴輪列の中心は円筒や朝顔形の埴輪でありまして、それは飲食物を入れた壷やそれをのせる器台に由来するものですが、奈良大学の水野正好先生によりますと、それらには、外からやってくる邪悪なものに食べ物を与え宴会を開くことによってお引き取り願う、逆にそうすることによって邪悪なものが寄りくるのを追い払うという意味があるのだということです。そのように考えますと、盾・靱・甲冑といった武具の形をした埴輪、あるいは大きな日傘の一種である蓋が立てられた理由も、盾や蓋がいちはやく出現した理由も分かってきます。これらの埴輪は、墳丘を飾るとともに、邪悪なものが寄りくることを防ぐ機能を果していたのであり、それは逆に、そうすることによって、まもられるべき亡き首長、あるいはその首長が眠る場の神聖が強調されていたものと考えることができるのです。

では、家や鶏、あるいは水鳥や舟などの埴輪にはどのような意味を与えることができるのでしょう。家の埴輪に関しましては、死者の住居とみる説や神霊の依代とみる説、あるいは墳頂部にあったと推定する建物の模造品と考える説などがありますが、現在の私は明確な答えをもっておりません。水鳥や舟を死者の魂の乗物と考えることもできるかもしれませんが、それにつきましても同様です。

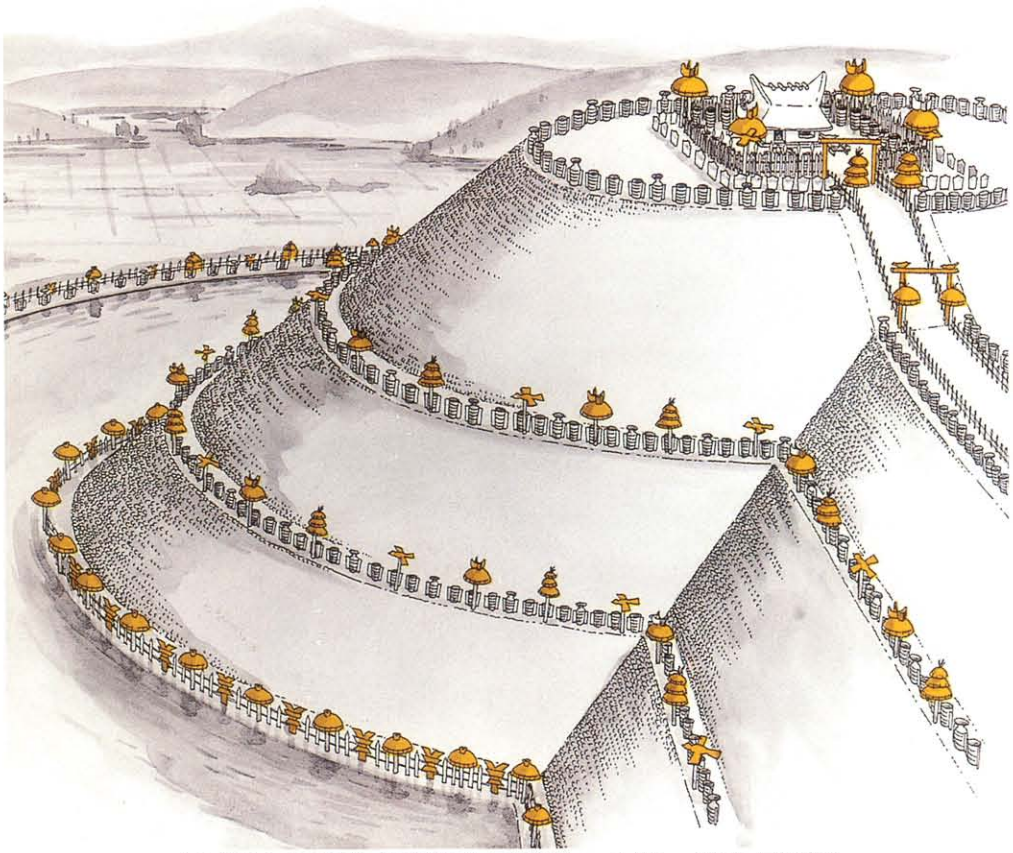
ところで、近年の古墳の調査では、墳丘には、以上のような土でできた埴輪のほかに、木の埴輪が少なからず立てられていたことが分かってまいりました。たとえば、奈良県の四条古墳や小墓古墳などで多くの木製品が発見されましたし、私たちが調査している鴨谷東1号墳でも、埴輪列のなかに、円筒や朝顔形など11本の埴輪をはさむような恰好で、それらが立てられていた柱穴がいくつもみつかっています（下図）。また、33頁に示しました図は山城郷土資料館の高橋美久二



鴨谷東1号墳における埴輪と柱穴の配列横式図

さんが、京都府の今里車塚古墳のことを念頭において描かれた、古墳がつくられた当初の推定復元図であります。そこにはふつうの土の埴輪とともに、木でつくられた蓋やそれが3重になったもの、あるいは盾形や鳥形のものが描かれていますし、鳥がとまっている鳥居や垣根のようなものも想定されています。これが正しいかどうか、あるいはどの程度普及していたか、といったことはまだまだ検討しなければなりませんが、古墳の表面が石と土、あるいは土でつくったものだけで覆われていたという考えはもはや捨てなければならなくなりました。四条古墳などで出土した木製品はもっと多様でありますし、色とりどりの布がはためいていたのかもしれません。したがって埴輪のもつ意味は、今後それらと一体のものとして理解しなければならなくなったわけです。しかし、それらの木の埴輪のなかで中心的な位置を占めているのも蓋や盾、あるいは鳥形をした木製品なのであります。

埴輪のもつ思想的な意味についてはごく一部しか触れることができませんでしたが、新池遺跡にまで話を及ぼすにはまだそうとう時間がかかりますので、先を



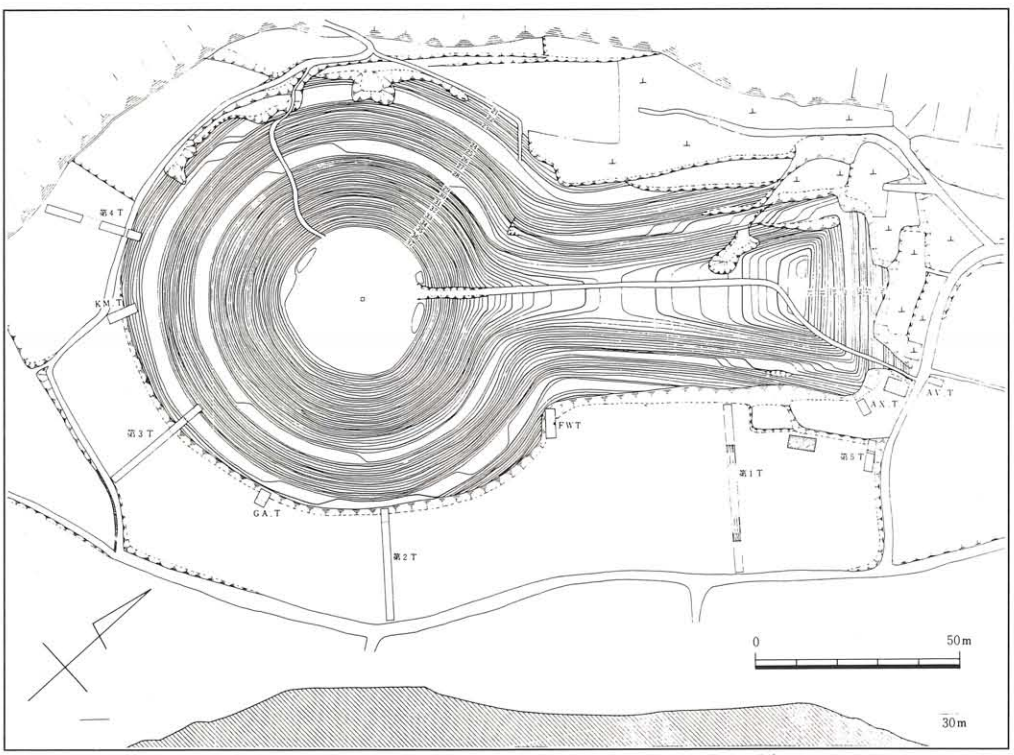
土の埴輪と木の埴輪（「京都古代との出会い」より）　作画：早川和子

弁天山C１号墳

急ぎたいと思います。

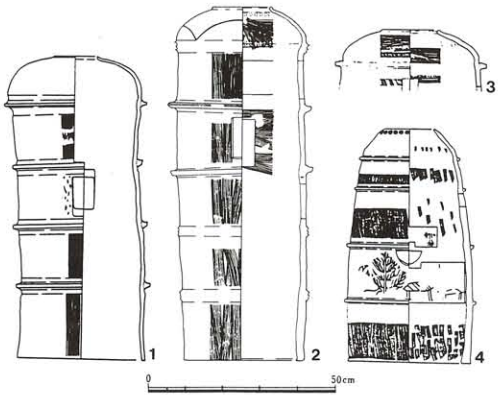
つぎは、このような埴輪をもっている古墳はどのような古墳かという話です。近畿の、とくに奈良や大阪に住んでおりますと、古墳というのはたいてい葺石があって埴輪があるものだと思いがちですが、じつは墳丘が段築といってお餅をかさねた鏡餅のような恰好で２段、３段につくられていたり、葺石がされていたり、埴輪が立て並べられていたりしている古墳はけっして多くないのです。たとえば、丹後の加悦谷へいきますと、古墳は千数百基ほどありますが、そのなかで墳丘の３要素がすべて備わっている古墳は７基ほど、埴輪をもっている古墳を数えても十数基程度なのであります。ですから、この地域では、埴輪は、丹後一円を治めた大首長墳やその勢力の一翼を担った各河川の流域の、たとえば加悦谷の首長墳、あるいはそれらと密接な関係にあるものなど、きわめて限られた古墳にのみ採用されたものであるということが分かります。

古墳時代前期後半を中心とする時期、丹後では日本海沿岸最大規模の前方後円



銚子山古墳（網野町文化財調査報告・第５集より一部改変）

墳がつくられました。加悦町蛭子山古墳、丹後町神明山古墳、網野町銚子山古墳の３基がそれで、全長150ｍから200ｍに達するこれらの古墳は、丹後一円を治めた大首長の墳墓と考えられます。丹後における埴輪の採用はこれらの大型前方後円墳の築造を契機としてはじまったものと推定されますが、墳丘外部施設の３要素の備わった整美な墳形からみても、その背景には畿内との密接な関係が推測されます。ところが、それらの古墳に用いられている埴輪をみてみますと、図のごとくでありまして、朝顔形埴輪の口頸部のないような独特の形をしたものが多く、それが円筒埴輪のように立て並べられているのであります。したがって、丹後では畿内の影響下に埴輪の樹立が開始されたわけでありますが、その形態に独自なものを生み出したということができます。当時において、円筒埴輪が顕著な特色をみせるということは、それが象徴する古墳祭祀そのものに相対的な独自性があったと理解されます。そして、その独自性がヤマト政権下においてもなお巨大な前方後円墳をつくることを可能にしたと考えられるわけであります。



丹後独特の埴輪
１法王寺古墳　２小銚子古墳　３網野銚子山古墳
４作山２号墳　（原図 佐藤晃一）

ところが、古墳時代中期になりますと、丹後一円を治めた大型の前方後円墳も、地域ごとにつくられた前方後円墳もみられなくなり、あとは地域ごとの首長墳が大型の円墳としてつくられるようになります。言いかえましたら、この時期、丹後では、ヤマト政権による地方支配が強化されるのにともない、古墳の築造に強

作り山１号墳（加悦町教育委員会提供）

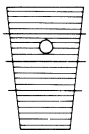
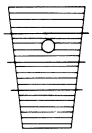
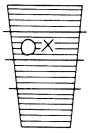
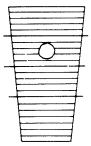
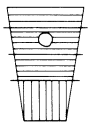
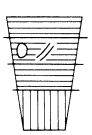
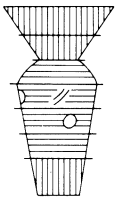
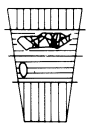
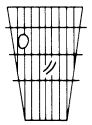
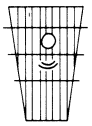
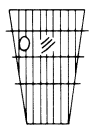
い規制が加えられ、前期にみられた独自性が失われていったと理解されるのです。そして、それと同様の現象は山城や和泉をはじめ各地にみられ、「古墳時代中期の墳丘規制」として認識されています。

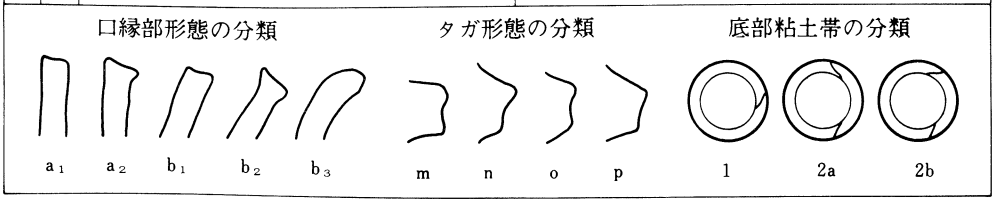
では、このような状況下において、埴輪はどうなったのでしょうか。私達が調査しています鴨谷東1号墳はまさにこの時期の、古墳時代中期前葉の、加悦谷の首長墳なのですが、そこでは丹後独特の形をした埴輪はごくわずかとなり、しかも、古墳の裏側ともいえるところに配置されています。そして、これに代わって主体を占めますのが、まさに畿内的な円筒埴輪なのです。墳丘の規制は埴輪の規制にまでおよんでいたわけであります。

37頁の図は鴨谷東1号墳から出土しました数十本の円筒埴輪と朝顔形埴輪の分析結果を表にしたものです。多くの埴輪には黒斑があり、埴輪を焼くのにまだ窯が使われていなかったと考えられる時期のものです。

ところで、それらは大きく3つのグループに分けることができます。第1のグループは埴輪の表面の調整に板状の工具をまず縦方向にもちい、突帯を付けた後、それを横方向にほどこすのが特徴です。これをタテハケ、ヨコハケと呼び分けますと、第2のグループはヨコハケを埴輪の中位から上位にのみほどこすもので、第3のグループはヨコハケをおこなわず、タテハケのみですませてしまうのです。そして、細部の形や技法、あるいはヘラ記号などから、第1のグループは3類に、第2のグループは1類（図8のⅣとⅤを同類とし、特殊なⅥ類を除く）に、第3のグループは3類に分けることができます。私達はここで分けた7つの類型が特定の工人、あるいは最小単位の工人集団に対応するのではないかと考えています。そして、グループとしたものは工人の系統の差ではないかと推定しています。第3のグループは前期以来の埴輪作りの技術の延長線上で埴輪をつくった可能性が高く、図には入っていませんが、この古墳から出土する丹後独特の形をした円筒埴輪もすべてタテハケで調整されています。それに対して、特定のヨコハケ（B種ヨコハケ）の技法は丹後ではまったく新しい技法なのであり、そこには畿内からの工人の移動を想定したいと思っています。

すなわち、古墳時代中期の規制は、墳丘の形や規模のみならず、埴輪の生産に対してもおこなわれ、丹後では、畿内から派遣された埴輪工人のもとに在地の埴輪工人が組織され、規格性の高い畿内的な埴輪を生産したと考えられるのです。このことは、古墳の築造自体に、言いかえれば古墳祭祀そのものに、ヤマト政権

			ヘラ記号無	ヘラ記号有
Ⅰ	A技法（ヨコハケ）	A_1	 U11 M24・28・29・30 ▼ M41 ① b_1 ② o類 ③ B種 ④ B種 ⑤ タテハケ・ナデ	
Ⅱ			 U13 M23・25・26 35・38・42 C1 ▼ L10 ① b_2 ② p類 ③ B種・類C種 ④ B種・類C種 ⑤ タテハケ	 M(32・34) ① b_2 ② p類 ③ 類C種 ④ 類C種 ⑤ タテハケ
Ⅲ			 M33・37・39 40 ① b_3 ② m類 ③ 類C種 ④ 類C種＋不規則 ⑤ タテハケ	
Ⅳ		A_2	 M 4・12・16 21 ▼ L12 ① a_2 ② m類 ③ B種 ④ — ⑤ タテハケ・ナデ	
Ⅴ				  M15 ▼ M31 ① b_2 ② m類 ③ B種 ④ — ⑤ タテハケ
Ⅵ		A_3		 M 5 ① a_2 ② m類 ③ B種 ④ — ⑤ タテハケ
Ⅶ	B技法（タテハケ）			 M6・9・13 20・22 ① a_1 b_1 ② n類 ③ — ④ — ⑤ タテハケ
Ⅷ			① 口縁部形態の分類 ② タガ形態の分類 ③ 外面調整ヨコハケの種別 ④ 第1段外面調整ヨコハケの種別 ⑤ 第1段内面調整 U 上位埴輪列　M 中位埴輪列 L 下位埴輪列　C 配列場所不詳 ▼ 朝顔形埴輪	 M14・18 (L8・11・16 C 2) ① b_1 ② o類 ③ — ④ — ⑤ タテハケ・ナデ
Ⅸ				 M3・10・11 17 ▼ M19・27 ① a_1 b_1 ② p類 ③ — ④ — ⑤ タテハケ



鴨谷東1号墳における円筒埴輪の諸類型

鴨谷東１号墳　円筒埴輪Ⅷ類とヘラ記号

がこれまで以上に深く関与してきたものと言うことができるのではないかと考えられます。丹後の首長層が保持していた古墳祭祀の独自性は大きく後退し、少なくとも古墳の表面の目にみえる範囲からは、丹後色は姿を消していったものと考えられます。この時期、畿内周辺のみならず、かなりの広範囲におよんだ古墳の規制は、経済的な理由を背景にもちつつも、在地首長層のより一層の序列化にともなう政治的・イデオロギー的な支配・統制の強化のあらわれであったと考えられます。古墳祭祀はきわめて政治的なものだったわけですが、埴輪工人は特定の権力のもとに組織され、政治の動向をまともに受けていたものと思われます。

ところがこの埴輪工人の実態そのものは、これまでほとんど明らかではありませんでした。ただ、その実態にせまるために、いろいろな方法が試みられてはきました。ひとつは、鴨谷東１号墳の例をとって話しましたような、古墳に立て並べられた埴輪をできるだけ詳細に検討し、そこから工人集団を抽出しようとする方法です。また、形象埴輪の作風から工人を特定しようとする方法も採られてきました。埴輪窯が発見されているような場合は、工房のあり方をかいま見るとともに、自然科学の応援を得て、供給先を検討するようなこともおこなわれています。しかし、今回調査された新池遺跡のような場合は、さきほどお話がありましたように、埴輪窯と工房と工人のものと推定できる住居とかが組み合わさって発見されたわけです。したがいまして、埴輪工人とヤマト政権、あるいはそれと密接に関連するこの地の政治勢力のもとに組織された人々の実態を如実に把握することができるようになったわけです。しかも、うまくいけば、そこで出土してくる埴輪を分析することによってこれまでおこなわれてはきたさまざまな方法を再

吟味することも可能になったかと思われます。端的に言えば、新池遺跡の調査は埴輪の生産・供給システムの研究に大きく寄与するだろうということであります。

埴輪の生産・供給システムの研究は、首長をめぐるどのような政治的関係のなかで、どのような組織を編成して古墳がつくられたのか、といった大きな研究課題にアプローチするうえでのもっとも有効な手段の一つと言うことができるでしょう。

ところで、古墳をとりまく政治的関係を分析していくためには、どうしても古墳を構成する諸要素を他の古墳のそれと比較検討し、その関係を明らかにしていく必要があります。その場合、どこでつくられ、どこへ持ち運ばれたかがはっきりしているものほど有効であることは言うまでもありません。しかも、それが古墳に限定して使われたものほど、移動の径路がより分かりやすくていいのです。ところが、このように条件を限りますと、これに適合する資料はわずかなものになります。もちろん埴輪はその一つでありますが、他にこれと対比できる資料として、最後に石棺を少し取り上げてみたいと思います。なぜなら、石棺は形態や使用石材や分布から、かなりの程度に、その製作地が限定され、どこへ持ち運んだかも判明してきているからです。

長持形石棺（前塚古墳）

たとえば、古墳時代中期でしたら、兵庫県の加古川下流域に組合式の長持形石棺のおもな製作地があり、それが畿内や岡山県や兵庫県北部などに持ち運ばれていますし、関東などでは派遣された工人がそれを製作しています。他方、刳抜(くりぬき)式の割竹形や舟形の石棺の製作地は熊本県や香川県、福井県など十カ所以上にあって、熊本県でつくられた舟形石棺は大阪府や京都府にまでもたらされているのです。すなわち、古墳時代中期の石棺に関しましては地方色のある石棺が各地でつくられ、それをつくる工人が移動したり、形態が模倣されたり、製品が遠方まで持ち運ばれたりするといった現象が認められるのです。そして、そのうえで、長持形石棺と舟形石棺のあいだに明確な分布の違いがあるということができるのです。

時間があまりありませんので、結論的に言いますと、いま、「棺」に関しましてはつぎのような考えをもっています。弥生・古墳時代の社会は基本的に血縁で結ばれた同族関係を原理とする社会であったと考えています。そして、そのような社会においては、弥生時代以来、棺は特定の同族集団、ないし特定の有力な同族を中心とした地縁集団にそれぞれ固有のものがあり、その形態や素材は習慣的に定まっていたと推測されます。ところが、そのような集団の関係が政治的性格を強めてくると、首長を中心とした同族関係は特定の地域をこえて広がるととも

舟形石棺（蛭子山古墳）加悦町教育委員会提供

に、棺はその配布自体に政治的な意味があたえられることになります。さらに、同族関係が政治的な意図のもとに擬制的に拡大されていきますと、棺の配布はある種の制度的きまりのもとに政治的行為としておこなわれるようになり、ついには身分秩序にしたがい、棺を含む葬具一式が国家によって下賜されるという段階が想定されます。

これを4つの段階と捉えますと、中期の多くの舟形石棺のように、おもに特定地域の首長間でのみ共有されたものは第2段階の前半、長持形石棺や中部九州の舟形石棺のように、地域を大きく越えて持ち運ばれたものは第2段階の後半、あるいは第3段階の前半あたりに相当するのではないかと考えられます。したがいまして、このような状況を背景に生み出されました長持形石棺と舟形石棺の分布の差異は非常に大きな政治的意味があるだろうということなのであります。古墳時代中期のヤマト政権の基盤を考えるうえで、長持形石棺の分布範囲はきわめて重要な意味をもつものと思われます。

ところで、埴輪にみられる複数の製作地、地方色、工人の移動、模倣、そして本日の司会をご担当の大船さんが指摘されているような埴輪そのものの持ち運びといった現象は、いま述べました石棺のそれと非常に類似する面が多くあるわけでありまして、両者は十分比較検討できる段階になったということができるのではないかと考えられます。埴輪と棺ではその性格が異なりますのでけっして同列に扱えませんが、性格が異なるからこそ、両者の比較はかならず興味深い成果をもたらしてくれるものと考えられるわけであります。

結論のない、わかりづらい話だったかと思いますが、最後までご静聴いただき、どうもありがとうございました。以上で話を終わらせていただきます。～拍手～

司　会

和田先生どうもありがとうございました。先生には「古墳祭祀と埴輪」ということでお話いただきました。死んだ人のためになぜ大きな古墳をつくったりするのか、あるいは石棺をどこか遠いところから運んできたり、埴輪を並べたりとか、実際に古墳をつくるというのは大変な労力がいるものでありまして、さらには被葬者の権力とか地位なども全部含めて考えていかないといけないというお話であったかと思います。

～10分間の休憩～

司　会

つぎに講演していただきます和田萃先生をご紹介させていただきます。先生は京都教育大学の日本史の講座を担当しておられます。専門の研究分野は古代史であります。新池遺跡では埴輪窯とか、埴輪の工房跡などがみつかったんですけど、どういう人達がそこで活動していたかということになりますと、考古学のほうではなかなかうまく追究できないわけです。そこで和田先生には古代史の研究の立場から「新池遺跡と土師氏」と題してご講演をお願いしたいと思います。～拍手～

「新池遺跡と土師氏」

京都教育大学教授　和田　　萃

ご紹介いただきました和田です。さきほど立命館大学の和田先生が非常に精密なお話をされたのですが、私の方は大雑把な話しになるかと思いますが、お許しいただきたいと思います。和田晴吾先生と私はまったく血縁でもなんでもありませんが、同じ「和田」同士でありまして、なかなかめずらしい講演会だなあと思っております。ただ関係はあるんでありまして、二人とも奈良高校の卒業生でありまして、私が若干先輩であります。それから京都大学では、私は日本史で、和田晴吾先生は考古学を専攻されました。同じ大学での同窓でもあります。今日はじめて伺って知ったのですが、ある本屋さんの私宛の請求書がまちがって、和田晴吾さんの方へいったという話しをききまして、それは申し訳ないことだったと思っている次第です。～笑い～

今日は、「新池遺跡と土師氏」というタイトルをいただいているんですが、まず土師氏について考えるに際しまして、埴という言葉を手がかりに考えてみたいと思います。現在、私たちは土を「ツチ」といっておりますけれども、古代では土のことを「ニ」といっていたんです。そしてその土のなかでも、赤い山土があります。そうしたところから、土は赤の丹と結びついたわけです。古代で「ニ」といいますと、土の「ニ」とそれから赤い山土の丹（ニ）と、同じ言葉だったんですね。さらに土のなかで粘り気のあるもの、そして捏ねると陶器になるもの、そういうものをとくに埴と言いました。さきほどの説明にも出ていましたけれども、埴でつくったものだから埴輪といい、またその埴輪をつくった人を土師（ハニ・ハジ）氏というふうにいったわけです。したがって、埴輪も土師氏も元来、埴という言葉に由来するといえます。この土と埴がどう違うのか、それは粘り気

のある、そして成形して焼けば焼き物・陶器になるものが埴なんですが、化学的に申しますと、粘土鉱物を含んでいるもの、これはカオリン属とよばれる物質を含んでいて非常に粘っこく、だいたい1770度から1790度で焼けばガラス質をおびた陶器になる、白っぽくなるそういうものです。

埴土を採取して埴輪をつくるまでには、随分いろいろと工程があります。埴土は不純物をいろいろ含んでいますから、長年月の間、雨や風にさらしておいたり、それからさらに水のなかでも、細かく砕いてふるいに通す、これを水簸(すいひ)あるいは水篩(みずぶるい)といった言い方をします。カオリン属を含む微粒子を集める、さらにそれだけではなくて、叩いたり、いろんなほかの土と混ぜ合わせたりして、埴輪をつくる原料にするわけです。

この埴・埴土のあるところというのは、埴輪の窯のあるところと重なる例が多い。あるいは巨大古墳群のつくられている地域と結びつくところが多いのです。とくに埴のたくさんあるところ、これはまたあとで説明いたしますけれども埴生(はにゅう)というふうに申します。そういうところに埴輪の窯がつくられる、あるいは埴輪にかぎりません。それは須恵器や瓦生産にも結びついてくるわけです。さらには埴輪窯の近くに巨大な古墳などがみられるという現象があるわけです。そういうことを少し分析してみたいと思います。

ところで、『古事記』『日本書紀』『万葉集』などをみてまいりますと、埴には呪力(じゅりょく)があるという信仰が古代にはあったようです。どうしてそういう呪力があるとされたのか、これはまだよくわかりませんが、それを捏(こ)ねることによって焼きあげ、まったく別の形につくりうる、そういうことが埴に呪力があるというふうな信仰を生んだのかも知れません。ただの山土をいくら捏ねてもボロボロで、そういう土器をつくれないわけです。やはりカオリン属という粘土鉱物を含んでいなければ、焼きあげることはできないわけです。

埴に呪力があったことを示す伝承はいくつかあります。たとえば和爾(わに)氏の本拠地、この和爾氏というのは渡来した王仁(わに)博士の王仁ではなくて、奈良盆地の東北、天理市から奈良市のあたりにかけて居住していました豪族で、5世紀後半から6世紀代に大きな勢力をもち、妃(きさき)を出したことで知られる和爾氏です。和爾氏のワニはいろんな字で書きまして、「丸」の一字で書いたりもいたします。和爾氏がもともと本拠としていたのは、天理市和爾町です。そこには、和爾坂とよばれる小さな丘陵があって、歌謡にもみえています。『古事記』の応神天皇の段に、「こ

の蟹や向処の蟹……」にはじまる有名な歌があります。あの歌のなかに和爾坂の土を歌っているのです。ふつうですと、ワニサカと訓むべきところですが、この歌謡では和爾佐〔坂〕（ワニサ）となっていまして、「和爾坂の土を初土は膚赤らけみ……」とよんだ歌がのこっております。和爾坂の埴は非常に呪力のあるものという歌なんですが、そこから乙女の眉毛の美しさを歌いだしています。この和爾坂はいろいろ伝承の舞台となっていますし、その坂の土が非常に呪力のあるものと信仰されていたらしい。ですから、この和爾には式内社の和爾坐赤坂比古神社があります。この赤坂彦の神というのは文字通り和爾坂の赤い土（埴）を男性の神として祀ったものです。ですから埴・埴土というのはいろんなところにあるのですが、特定の場所の埴はとりわけ呪力があると考えられていたらしい、ということがわかります。

こうした埴のもつ呪力に関連してすぐに思い出されるのは、天香具山の土・埴土が非常に呪力のあるものとして信仰されていたことです。それは神武伝承や崇神紀の伝承のなかにもみえています。天香具山の土で土器をつくり、そして神祀りをするということが重要な政治的意味をもっていたわけです。大和三山といわれる畝傍山・耳成山・天香具山、そのなかで天香具山だけが神聖視されている。天がつくように、天上・高天原から地上におりてきた山、あるいは地上の香具山の真上に高天原の天香具山がある、そういう宇宙構造が観念されていたわけで、香具山にだけとくに天という言葉をつけています。同じような例として、二上山を「中臣の寿詞」では「天（アメ）の二上」と訓んでいまして、『古事記』や『日本書紀』にはそういう伝承はないんですが、「中臣の寿詞」だけに二上山も神聖な山なんだという伝承がみえています。香具山も同様に、その土は呪力があるとされていた。香具山の西に、古代には埴安の池があって、やはり埴という言葉がみえています。またそこには哭沢女の森として知られている式内社、畝尾都多本神社があります。その哭沢女の森に接して畝尾坐健土安神社があります。その神社は文字通り香具山の埴土が呪力あるものということを示しています。畝尾坐健土安神社というのは香具山の西にのびる尾根の先端に祀られていて、この埴土を男性の神、健土安神として祀っているのです。香具山へ行かれたらぜひとも見ていただきたいのですが、畝尾都多本神社のすぐ東北に接して健土安神社があり、そこにはかつての埴安の池の痕跡が残っています。これは現状でもよくわかるもので、比高差約２ｍ程の堤がのこっています。ちょうど神武東遷伝承や崇神紀に、

この香具山の土は倭国の物実である、大和の国を支配するシンボルである、そういった伝承がみえています。

この香具山の埴土に関連して、現在大阪府の住吉大社では「埴使いの神事」という儀式がおこなわれていて注目されます。住吉大社では祈年祭・新嘗祭にさきだち、畝傍山の埴土をとりにいく、そしてそれから「天の平瓮」をつくって祀るという神事がみられます。

江戸時代以来の記録では、香具山ではなくて畝傍山の頂上に登って埴をとる、そして「天の平瓮」をつくるというふうになっています。住吉大社に伝えられています『住吉大社神代記』の奥書きは天平3年になっていますが、近年ではむしろ平安時代の初め頃のものとされています。国宝に指定されている『住吉大社神代記』では、『日本書紀』のとおり、天香具山に埴をとりに行っています。

畝傍山の西麓に畝火山口坐神社があって、そこの神官の方とともに、頂上に登って埴をとる、その場所は秘密になっているのですが、米粒のような埴土を採取します。分量が少なく、それだけでは土器ができないものですから、ほかの土と混ぜて「天の平瓮」をつくっています。明らかに伝承に混乱があり、古くは住吉大社の「埴使い」は香具山であったのに、近世以来、畝傍山に変わっているわけです。これはおそらく「畝尾坐」という部分を訓み間違えたんだろうと思います。この「畝尾坐」というのは、天香具山の尾根の先という「畝尾」なんですが、近世以降これをウネビ（畝傍）と読んでしまったために、もともと呪力をもつ埴土は香具山のものでなければならないのに、畝傍山になってしまった、それが現在にいたっている、そういうことではないかと思われます。少し話がそれてしまいましたけれども、埴には神秘的な力がある、呪力があると、そういう信仰があったということです。

さきほどそうした埴のあるところを、「埴生」と言うと申しましたが、地名にも「埴」のつくものがたくさんあります。新池遺跡の報告のなかでも話題になっています『欽明紀』の記事には、新池遺跡の場所が「埴廬」というふうに表現されています。こうした埴のつく地名をみますと、たとえば飯豊青皇女という女性は最初の女帝ではないかとされるんですが、この飯豊青皇女の墓は「葛城埴口丘陵」というふうにみえていて、そこにも埴の地名がみえます。現在は御所市北花内という地名で、「埴」が「花」（ハナ）に変わったのでしょう。それから仁賢陵の名称は「埴生坂本陵」です。羽曳野丘陵が古代では埴生坂と呼

ばれていたわけです。この埴生坂を歌った「履中紀」の歌謡がありますし、ほかにも例えば来目皇子（くめのみこ）を「河内埴生山」の上に葬るとか、そういう記事があります。古市古墳群、とくにその南群の一帯は羽曳野丘陵の東側に位置し、埴生坂の地名から羽曳ケ丘になり、そこから現在の羽曳野市の地名が生まれているのです。その埴土があるところに、やはり野々上（ののうえ）窯などの埴輪窯がつくられていますし、そして古市古墳群が近くにあるわけです。

巨大な前方後円墳などがつくられるには、いろんな条件があります。たとえば大山古墳（仁徳陵）のように、全部が盛土であるような巨大古墳の場合は非常に重量がかかりますから、地盤の安定したところ、いわゆる洪積台地でなければならないという条件があります。それからまた墳丘に葺く葺石は膨大な量ですから、それらを運ぶのに便利なところ、そうするとやはり近くに河川があるという条件が必要です。また大量の埴輪が並べられるわけですから、近くにそうした埴・埴土のあるところを選ばなければならない。さらには近くに盛土に用いる土採りが可能なところといいますか、大山古墳や誉田御廟山古墳（応神陵）の場合はたくさんの土量が必要でしたから、そういう土採りに便利という条件が必要です。このように巨大古墳の場所と埴輪をつくるところというのは密接なかかわりがある。埴から少しいろんなところに話がわかれてしまいましたが、もとに戻しますと、埴のあるところが「埴生」という地名のおこりなんだということです。新池遺跡の場合は「埴廬」と呼ばれていますが、皆さんもご覧になられたように、新池遺跡では粘土層（ハニ）がみごとなまでに広がっています。そして、その埴をつかって3つの工房では埴輪がつくられている。文字通り埴のあるところ、埴土のあるところに新池遺跡があるといってもよい、そういう場所であるわけです。

奈良県下あるいは大阪府下の巨大古墳群についても、この埴と結びつくところがいくつかあるように思われます。たとえば奈良山丘陵の南斜面には、佐紀盾列（さきたてなみ）古墳群があり、その北側の南山城には、上人ケ平（しょうにんがひら）遺跡のように埴輪窯と古墳がみつかっているところもあります。奈良山丘陵は奈良時代に瓦窯がたくさんつくられています。「青丹よし奈良の都」という「青丹」は文字通り「青い丹」で、これは埴なんです。「青丹よし奈良」と呼ばれるのは、奈良山丘陵が埴に恵まれたところからの命名なのです。したがって埴輪窯の所在地、あるいは巨大古墳群の所在地は、そうした埴のあるところと深く結びついているわけで、そしてまた土師氏の分布とも対応しているということがいえるわけです。そうした観点から土

師氏にかかわる問題をもう少し深めたいと思います。

お手元に資料が配られていますので、それを併せて参照していただきたいのですが、私は古代史の専攻ですから、埴輪を直接論じ得るような材料はあまりありません。土師氏を手掛かりにして少しアプローチしてみたいと思います。

埴輪の起源伝承はよく知られています。資料の垂仁紀28年および32年の条をご覧いただきたいとおもいます。28年冬10月条によれば、倭彦命が亡くなって、身狭桃花鳥坂に葬られるわけですが、その時、近習の人達を生きながらに埋めたという記事がみえています。現在、この倭彦命の墓は橿原市の船付山というところにありますけど、人を生きながらに埋めた、いわゆる殉死させたので非常に悲惨な状況であったということがこの条に記されています。それで同じく32年の７月に、垂仁天皇の皇后である日葉酢媛命がなくなった時に、野見宿禰が奏上して、埴輪を立てたという伝承がみえているわけです。この条によれば、野見宿禰は出雲国の土師部100人を召しあげて、みずからそれらの人々を率いて埴を採り、

垂仁紀

廿八年冬十月丙寅朔庚午、天皇母弟倭彦命薨。〇十一月丙申朔丁酉、葬二倭彦命于身狭桃花鳥坂一。於是、集二近習者一、悉生而埋二立於陵域一。數レ日不レ死、晝夜泣吟。遂死而爛臭之。犬烏聚噉焉。天皇聞二此泣吟之聲一、心有二悲傷一。詔二群卿一曰、夫以二生所レ愛、令レ殉二亡者一、是甚傷矣。其雖二古風一之、非レ良何從。自レ今以後、議之止レ殉。卅年春正月己未朔甲子、天皇詔二五十瓊敷命・大足彦尊一曰、汝等各言二情願之物一也。兄王諮、欲レ得二弓矢一。弟王諮、欲レ得二皇位一。於是、天皇詔之曰、各宜レ隨レ情。則弓矢賜二五十瓊敷命一。仍詔二大足彦尊一曰、汝必繼二朕位一。

卅二年秋七月甲戌朔己卯、皇后日葉酢媛命（一云、日葉酢根命也。）薨。臨葬有レ日焉。天皇詔二群卿一曰、從レ死之道、前知二不可一。今此行之葬、奈之爲何。於是、野見宿禰進曰、夫君王陵墓、埋二立生人一、是不良也。豈得レ傳二後葉一乎。願今將議二便事一而奏之。則遣二使者一、喚二上出雲國之土部壹佰人一、自領二土部等一、取レ埴以造二作人・馬及種々物形一、獻二于天皇一曰、自レ今以後、以二是土物一更二易生人一、樹二於陵墓一、爲二後葉之法則一。天皇、於是、大喜之、詔二野見宿禰一曰、汝之便議、寔治二朕心一。則其土物、始立二于日葉酢媛命之墓一。仍號二是土物一謂二埴輪一。亦名二立物一也。仍下レ令曰、自レ今以後、陵墓必樹二是土物一、無二傷人一焉。天皇厚賞二野見宿禰之功一、亦賜二鍛地一。卽任二土部職一。因改二本姓一、謂二土部臣一。是土部連等、主二天皇喪葬一之緣也。所謂野見宿禰、是土部連等之始祖也。

（「日本古典文学大系」より）

人・馬および種々（くさぐさ）のものの形をつくって、天皇に献上した。そしてそれを陵墓に立てて並べたという伝承です。これは埴輪の起源伝承としてよく知られているものです。要するに、埴輪というものは殉死に替えるものなのだということが、垂仁紀28年・32年条にみえているわけです。日本の古代には、殉死は実際におこなわれたらしく、「大化の薄葬令」ですとか、清寧即位前紀あるいは『播磨風土記』に断片的な伝承がみえています。しかし殉死にかえて埴輪を樹立するようになったというのは、あくまでも埴輪の起源伝承にすぎません。埴輪でもっとも古いのは円筒埴輪や朝顔形埴輪です。形象埴輪にしましても、家や鶏などを形象った埴輪が古いわけで、人物埴輪が出てくるのは5世紀後半にすぎません。したがって殉死にかえて埴輪をつくったというのは後にできた伝承であり、史実と考えることはできません。

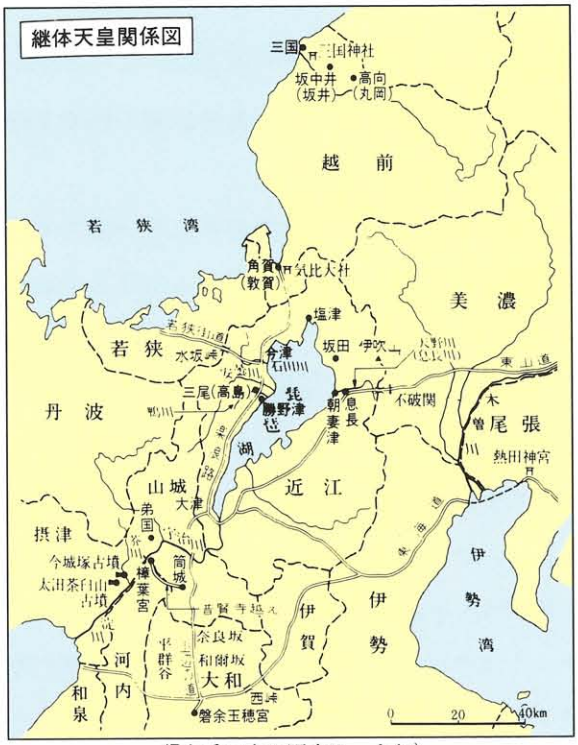
土師氏がどういう職掌にあずかっていたかということは、これまでいろんな方々の研究があります。とくに代表的なのは直木孝次郎先生の「土師氏の研究」という論文でありますが、そのほか何人かの方が土師氏について究明しておられます。土師氏はその言葉からも連想されますように、埴輪づくりをする工人達で、それに関連しまして、いろんな喪葬儀礼にかかわる、そういうことが職掌の第一にあげられます。このソウソウをモソウ（喪葬）と書いていますが、私はこれを単なる野辺の送りというのではなくて、日本の古代においては、まず殯（もがり）の段階におけるいろんな儀礼があります。土師氏は殯にも深くかかわっていますので、とくにソウソウという場合には喪葬の字を使っています。のちに土師氏は、大王あるいは皇后、皇子・皇女といった身分の高い人々の喪葬儀礼に関与したことがいろいろ史料に出ています。確実なところですと、推古11年に亡くなりました聖徳太子の弟、来目皇子の殯に際し、土師連猪手（はじのむらじいて）という者が掌ったという史料があります。また白雉（びゃくち）5年12月の孝徳天皇の喪葬儀礼には、百舌鳥の土師連土徳（つちとこ）という人物が関与しています。土師氏のなかの族長クラスは、そうした大王の喪葬儀礼に関与したという史料がみえています。そういうふうなことで土器（土師器）づくり、埴輪づくり、さらには喪葬儀礼に関与するということが、土師氏のもっとも基本的な職掌であったと思われます。直木先生のご指摘によりますと、のちに土師氏は軍事的な面にも活躍しています。たとえば楯伏舞（たてふしまい）を土師氏は奏上するのですが、こうしたところからも、土師氏の軍事力というのは非常に重視されていたことがわかります。さらに外交といった側面にもかかわっていることが指摘さ

れています。

さきほどの垂仁紀の記事にもどりますけれども、注目すべき点がいくつかあります。それは土師氏・土師連の祖である野見宿禰がどうも伯耆や出雲の出身と伝承されていたのではないか、と思われることです。

因幡国の高草郡といいますと、だいたい現在の鳥取市を中心とした一帯です。高草郡には大野見宿禰神社という式内社があります。私は一度行ったことがあるのですが、小さな社で荒廃しています。この式内社は文字通り野見宿禰を祭神としている神社です。それから同じく高草郡には式内社に天穂日命神社があります。天穂日命は土師連と出雲臣の共通した祖先神です。高草郡に大野見宿禰神社と天穂日命神社があるということは、やはり土師氏のひとつの中心がこの因幡の国にあるということを示すものだろうと思われます。そうすると、さきほどの垂仁紀の記事で、野見宿禰が出雲国から土部100人を連れてきたというところと齟齬するわけですが、むしろ出雲国と結びつくようになるのは、出雲国が畿内王権に服属して後、出雲を日本の西の端の国で、黄泉の国と接するのだという観念が生まれてから、野見宿禰が出雲出身という伝承が生まれたのではないか、元来は因幡とむしろ深いつながりをもっていたのではないか、そういうふうなことがあるいは推測できるかもしれません。因幡国には、高草郡ではないんですが、土師氏の分布が確かに文献のうえで確かめられます。それからこの天穂日命神社についてですが、山城国宇治郡にも天穂日命神社があります。雄略紀17年条にみえる贄土部の伝承に、山背の内村と俯見村がみえ、それと結びつくものでしょう。大和から因幡に至るルートとして、この北摂の地から、能勢、福知山を経由して、丹波から但馬、因幡を結ぶ道筋があり、このルート沿いに贄土部の分布があって注目されます。新池遺跡も、そうしたルート沿いに位置しているのではないかと思われますので、土師氏との分布で少し整理してみたわけです。

もうひとつ土師氏の分布に関して当然考えられるのは、この新池遺跡と継体陵あるいは今城塚古墳とのかかわりです。さきほど森田さんから「新池遺跡にみる埴廬」の講演で説明がありましたように、5世紀中頃から新池遺跡でつくられた埴輪は、太田茶臼山古墳（現在、継体陵に治定）に、そして6世紀代のものは、真実の継体陵と考えられる今城塚古墳に供給されている、そういうことが新池遺跡の発掘調査の結果によって判明してきたわけです。そのあたりをもう少し古代史の立場から考えてみたいと思います。太田茶臼山古墳は、現在、継体陵に治定



(「大系日本の歴史２」より)

継体紀　元年

（略）○癸酉、納二八妃一。納二八妃一、雖レ有二先後一、而此曰二癸酉一、納二初拝一者、據下即天位、占二擇良日一、後宮、爲レ文。他皆放レ此。元妃、尾張連草香女曰二目子媛一。更名色部。生二二子一。皆有二天下一。其一曰二勾大兄皇子一。是爲二廣國排武金日尊一。其二曰二檜隈高田皇子一。是爲二武小廣國排盾尊一。次妃、三尾角折君妹曰二稚子媛一。生二大郎皇子、與二出雲皇女一。次、坂田大跨王女曰二廣媛一。生二三女一。長曰二神前皇女一。仲曰二茨田皇女一。少曰二馬來田皇女一。次、息長眞手王女曰二麻績娘子一。生二荳角皇女一。荳角、此云二美佐伎一。是侍二伊勢大神祠一。次、茨田連小望女、或曰二關媛一。生二三女一。長曰二茨田大娘皇女一。仲曰二白坂活日姫皇女一。少曰二小野稚郎皇女一。更名長石姫。次、三尾君堅楲女曰二倭媛一。生二二男二女一。其一曰二大娘子皇女一。其二曰二椀子皇子一。是三國公之先也。其三曰二耳皇子一。其四曰二赤姫皇女一。次、和珥臣河內女曰二夷媛一。生二一男二女一。其一曰二稚綾姫皇女一。其二曰二圓娘皇女一。其三曰二厚皇子一。次、根王女曰二廣媛一。生二二男一。長曰二兎皇子一。是酒人公之先也。少曰二中皇子一。是坂田公之先也。

（「日本古典文学大系」より）

されているわけですが、もう一つ注目されるのは、太田茶臼山古墳とまったく同じ規模の古墳として、古市古墳群中の墓山古墳と、允恭陵に治定されています市野山古墳があげられます。これは上田宏範先生などが指摘されていることです。そういう点からしますと、５世紀中頃から６世紀中頃にかけて、新池遺跡で活動した集団は古市古墳群にかかわる土師氏と深い結びつきがあったといえます。古市古墳群の地にいました土師氏は、改姓しなかった土師氏の本宗家です。その土師氏と密接なつながりがある古市古墳群には巨大な大王墓が密集しており、その埴輪づくりなり喪葬儀礼にかかわった集団が、三島の太田茶臼山古墳や今城塚古墳といった大王墓あるいはそれに匹敵する巨大古墳と深く結びついているということです。

さきほど市野山古墳は允恭陵に治定されていると申しましたが、墓山古墳も200ｍをこす巨大な前方後円墳でありながら、陵墓に治定されていない珍しい事例ですが、この三者がほぼ同じ大きさでかつ同じプランだということは注目されるべきだと思われます。

真実の継体天皇陵は今城塚古墳

であるということは、これまで数多くの方々が指摘されています。それでは太田茶臼山古墳はどういうことになるんだろうかと考えますと、私はやはりこの三島の地が継体天皇の基盤の地であったということと密接に結びつくのではないか、そういう理解をしています。50頁に示しました地図は継体にかかわる地名を記入したものですが、その下に継体天皇の妃たちに関わる記事を挙げています。この史料によりますと、継体天皇にはたくさんの妃がいるわけですが、ただ『古事記』と『日本書紀』とでは若干内容が違っています。『日本書紀』によりますと、継体がその勢力の基盤としました近江とか尾張のほかに、北河内と結びつく茨田連がみえています。この茨田連小望の女、關媛が継体との間に茨田大娘皇女をはじめ3人の女性を産んでいます。また、継体は元年に樟葉宮で即位したあと、山背の筒城宮、弟国宮を転々として、大和の磐余玉穂宮に入るわけです。その宮の所在地をみますと、北河内、南山背の筒城宮は現在の同志社大学の田辺キャンパスのところ、それから乙訓の地にも宮をおいていました。そして北摂の地に藍野陵が造られています。ですから継体の勢力の基盤の地は近江や尾張ですが、そのほかに北摂、南山背、そして乙訓の地など、ちょうど淀川流域も加えて考えてよいでしょう。

太田茶臼山古墳は継体の二代ほど前の人物が葬られていると考えられます。その規模は、大王陵である可能性が大きい市野山古墳や墓山古墳と同じであるという点をどう考えるべきか問題を残しますが、私は隅田八幡宮の人物画像鏡にそれを解く鍵があるのではないかと思っています。この隅田八幡宮の人物画像鏡は癸未年ではじまるもので、癸未年については443年あるいは503年の両説があります。私はいろんな点から443年、ちょうどその時期は允恭天皇の時代にあたっているわけですが、443年のものと考えています。ここに人物画像鏡の銘文があがっていますが、このなかに男弟王という人物が出ています。男弟（ダンテイ）

隅田八幡宮人物画像鏡
（「日本原始美術大系」4より）

人物画像鏡銘文
癸未年八月日十大王年男弟王在意柴沙加宮時斯麻念長
奉遣開中費直穢人今州利二人等取白上同二百旱作此竟

と訓んでいいものだと思いますけれども、その銘文中に「意柴沙加宮に坐ししとき」という表現があって、そこに斯麻という人物がみえます。この斯麻という人物を、三島地域と結びつける可能性も一案だと思いますが、私はむしろ継体からしますと曽祖父にあたる意富富杼王という人物に結びつける案に魅力を感じています。この意富富杼王という人物の妹ないし姉が允恭の皇妃になりました忍坂大中姫という女性です。それでこの男弟王というのは、忍坂大中姫の兄弟で、允恭からすれば男弟王にあたる意富富杼王ではないか、と憶測しています。意富富杼王は允恭と同世代であり、允恭の皇后の弟にあたる人物がこの三島の地にいたということが、継体の基盤を北河内や南山背、あるいはこの北摂に結びつける原因となり、また継体がこの地に藍野陵を造って葬られるという背景になるのではないか、まあ、非常に漠然とした仮説ですが、そういうふうなことを考えています。したがって、太田茶臼山古墳の被葬者は允恭ともかかわりの深い人物ということになります。太田茶臼山古墳や市野山古墳が墓山古墳と深い結びつきがあるとすれば、こうしたことも想像できるのではなかろうかと思います。

森田さんのご報告のところに、『日本書紀』がひかれていますけれども、欽明23年に新羅から使いがやってまいります。ちょうど欽明23年には新羅によって任那が滅ぼされたその年にもあたります。そんなこともあって、新羅の人々は郷里へ帰ることなく、この「三島の埴廬」の地に住んだという記事がみえているわけです。私は、新池遺跡の埴輪窯が稼働していた時期に、ここに土師氏が居住していたことが、三島に野見宿禰が祀られる背景にあると思うんです。欽明23年に新羅の人々が住みだしてから『日本書紀』が編纂される時代までは、新羅の人々がここを居住地としていて、土師氏とのかかわりはむしろ薄れていくのではないか、というふうな考えをもっています。さきほどのご説明にもありましたように、新池遺跡の所在地は、高槻市土室で、ツチムロと書いてハムロとよんでいますが、これが埴廬と結びつくことは当然考えられるところです。埴廬というのは埴でつくった家に由来する地名なのか、いわゆる土壁ということなのかよくわかりませんが、埴でつくったということであれば、部屋のことを室ともいいますから、「埴廬」が「埴室」に、そして「土室」になっていくというようなことが、地名の上から想像できるように思われます。また実際に、この新池遺跡にはみごとなばかりに埴の層があり、そしてそれを使って埴輪をつくっているわけで、この土室という地名が埴にもとづくことは当然予想されます。ハムロという地名はほかにもあり

ます。磯長の敏達陵の近くも葉室ですし、あの葉室の地名もやはり埴にもとづくのではないかということが考えられます。また堺市の日置荘遺跡は、最近埴輪窯がいろいろ発見されているというところですが、先日いただきました『大阪府の埴輪窯』という冊子でみておりますと、この日置荘遺跡のすぐ北に羽（土）室池という池が現在も残っております。そうした点からみて、土室という地名は埴にもづくものであり、そして堺市の日置荘とこの新池の場合は、そこに実際に埴輪窯が発見されているわけです。このようなことから考えてみますと、奈良時代の三島地方に土師氏が居住していたということは、現在の資料からはまだつかめませんが、野見神社があり、濃味郷があるということ、そして埴輪が生産されていたところから、土師氏とのかかわりが当然想定できるところです。

埴のあるところに埴輪窯がつくられるというのは、新池遺跡だけではなくて、茨城県の馬渡埴輪窯跡群も埴の層が報告されています。その埴のあるところと埴輪窯が結びついています。そういう埴土・陶土のあるところと、いろんな焼き物の窯がつくられるところが結びつくのは、現在の信楽とか瀬戸とかをあげるまでもありません。実際そういう生産をする場合、材料がそこにあるというのがもっとも重要な点です。そしてそこでつくられたものが、たとえばこの新池遺跡でつくられた埴輪がこの三島だけではなくて、さらに遠くまで供給されているという事実も、もちろん一方ではあります。そして埴輪窯があるのは必ず大古墳の近くなんだということは、一面では真実でありますが、東北地方では埴輪工人が移動しているのではないかと思われる事例があります。遠隔地でありながら、出土する人物埴輪の顔の表情とか、手の付け方がまったく同じだという事例の存在も指摘されています。ですから埴のある場所だけではすべてを解決できるわけではなく、埴輪工人の移動でありますとか、川などを利用して埴輪を遠隔地へ運ぶということも考えておかなくてはなりません。しかし埴土のあるところに注目すれば、そういう巨大古墳群とのかかわりとか、土師氏とのかかわりとか、そういういろんなことを説明できそうだということであります。どうも大雑把な話になりましたけれど、長時間にわたり、ご静聴ありがとうございました。～拍手～

司　会

和田先生どうもありがとうございました。「新池遺跡と土師氏」ということでご講演をいただいたんですけど、実際に私達が遺跡の調査をいたしますと、具体的な人物像や背景となる豪族など出てこないわけです。その点で和田先生のお話

は、古代史の中に新池遺跡を位置付けるうえで多くの示唆が含まれていたように思われまして、大変興味深く拝聴することができました。

一応これで本日の講演会を終了したいと思います。新池遺跡の発掘調査も、もうしばらくで終わりますが、これだけ大規模な調査というものはそう滅多にございませんので、それだけに多くの成果があがってくるものと思われます。今日はその一部をご報告するとともに、お二人の先生方にはお忙しい時間を割いてご講演をいただきました。またみなさま方には長い間、熱心にお聴きいただき、ありがとうございました。～拍手～

参考文献

網野町教育委員会1987『銚子山古墳・小銚子古墳発掘調査概要』京都府網野町文化財調査報告第5集

上田宏範1969『前方後円墳』学生社

笠野毅1976「大市墓の出土品」『書陵部』紀要

京都大学文学部考古学研究室向日丘陵古墳群調査団1971「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』第54巻第6号

近藤義郎編1987『岡山県の考古学』吉川弘文館

高槻市教育委員会1989「新池遺跡第2回現地説明会資料」

高橋美久二1988「『木製の埴輪』再論」『京都考古』49

直木孝次郎1960「土師氏の研究」『人文研究』11巻9号大阪市立大学文学部

原口正三ほか1973『高槻市史』第6巻（考古編）高槻市役所

免山篤1971「大阪府高槻市土室の埴輪窯」『古代学研究』62

森田克行1990「集落遺跡の実例　3.新池遺跡」『古墳時代の研究』2　雄山閣

森田克行1990「埴輪づくりの村」『図説大阪の歴史』河出書房新社

立命館大学文学部1989『立命館大学文学部学芸員課程研究報告』第2冊

和田萃1982「ハニ・土師氏・古墳」『考古学と古代史』（同志社大学考古学シリーズⅠ）

和田萃1988「古墳の時代」『大系日本の歴史』2　小学館

和田晴吾1989「墳墓と葬送」『古代史復元』第6巻 講談社

新池埴輪窯関連年表

年代	大王崩年(古事記)	五王	須恵器	埴輪	新池窯	三島の古墳	備　　考
	応神 400(394)			Ⅲ期		前　塚	
400	仁徳	讃?	TK73	Ⅳ期			
						岡本山A 3	高句麗·好太王碑
			TK216				
	433(427)						京都府·鴨谷東1号墳
	履中 438(432)	珍?					
	反正 443(437)	珍?	TK208				和歌山県·隅田八幡画像鏡
	允恭	済			A群窯	太田茶臼山	(オホホド王「上宮記」逸文)
450						墓谷2号	
	460(454)						市野山(允恭陵)
	安康 463	興					千葉県·稲荷台1号墳
	雄略	武	TK23		B群窯	土保山	
						二子山	
			TK47				
						番　山	埼玉県·稲荷山古墳
	496(489)			Ⅴ期			
500	清寧 500		MT15				
	顕宗 502						
	仁賢 510						
	武烈 517						
	継体						(ヲホド王「上宮記」逸文)
	531(527)				C群窯	今　城　塚	磐井の反乱
	安閑 535(535)		TK10				
	宣化 539(539)					川西4号	
	欽明					南　塚	
550						昼神車塚	
			MT85				
							島根県·岡田山1号墳
	571(571)					耳　原	
	敏達		TK43				

《エピローグ》

当日は小雨まじりのあいにくの空模様ではありましたが、講演会のはじまる午後1時前には会場もほぼ満席となり、主催者側の安堵感がひろがるなかで開会の運びとなりました。約300名にのぼる参加者の大半は高槻市在住の方でありましたが、京都・兵庫・奈良などの近隣の地域、遠くは和歌山・三重のほうからもお越しくださいました。新池遺跡の調査が世間の人々にこれほどまでに関心をもっていただいていることを知り、いまあらためて驚き、ありがたく思うものであります。

さて講演会のほうは、司会を軽妙な語り口の大船次長がつとめ、冒頭に冨成所長の挨拶がありました。そして最初に私が基調報告をおこないました。登壇のときに、心のなかで「考古学をやさしくしよう！」と念じた次第ではありますが、講演集に示しましたように、なかなか難しいものとなりました。とくに今回は最低限言うべき分量がきまっており、それを限られた短い時間内におさめようということで、かなり無理があったようです。しゃべっていても自分でアップテンポになるのが分かり、やさしくする余裕はありません。若さのせいでしょうか。講演の眼目といたしましては、この貴重な遺跡の状況というものをできるだけ具体的なかたちでお話するということではありますが、その分、遺跡への思いというものを充分に語ることはできませんでした。やはりスライドをもっと厳選しなければという思いが残ります。

ひきつづきましては和田晴吾先生の登場です。和田先生は大部なレジュメをご持参されたヤル気満々の先生でありまして、資料を駆使したご講演は説得力のあるものでした。それでいて語り方はあくまでも優しく、声音も朗々としておられました。お話も、古墳をつくるということはどういうことなのか、埴輪を立て並べるのは何故か、という問題を分かり易く解説していただきました。そして新池遺跡で検出した埴輪窯・工房・工人集落を分析して埴輪の生産体制が解明されれば、古墳をつくるシステムもより明確になってくるだろうと結ばれ、新池遺跡の発掘調査の意義を解くとともに、今後の指針を示されました。

つぎは和田萃先生であります。先生のご講演は理路整然とした組み立てのうえに立って、ひとつ一つの事象を丁寧なものの言い方で説明してくださいました。そして聴く人にとっては、かなり難解な文献資料を平易に解説し、それも聴衆が納得するまで何回も繰り返すというふうで、ときには板書を用いるなど、講演の

テクニックは秀逸でありました。長年、学生さんを指導してこられた賜物でありましょうか。お話は、まず「埴」と「土師氏」について、文献を駆使した総論からはじまり、ついで継体大王とのかかわりから太田茶臼山古墳や今城塚古墳についての考えを簡明に述べられました。とくに太田茶臼山古墳の被葬者については、先生の最近の著作をさらに一歩踏み込んだもので、興味深く拝聴できました。

われわれが講演会の記録を書き起こしますと、どうしても体裁を文章として整えてしまうことから、できあがった講演録の字面をおいかけるだけでは、なかなか講師の人柄までは伝わってまいりません。やはり生のお話しを聴くのがベストではありますが、数多くの講演会をまっとうするのは困難でありましょう。今回のそれぞれの先生方の講演の調子をあらわすのに、音楽の標語をかりれば、和田晴吾先生はモデラート調、和田萃先生はアンダンテ調、さしずめ私はアレグロ調といったところでしょうか。

なお当日は講演会の模様を記録映画におさめるためにカメラを回していたので、両和田先生をはじめ皆さんにもご迷惑をお掛けしたことと思います。この場をかりてお許し願うものであります。また講演会のテープの書き起こしについては、白銀良子氏の手を煩わしました。心より感謝申し上げます。　　（K.M）

復元画「埴輪工房」について

この３号工房の床面積はざっと83畳分もある。屋根の規模に比べて柱は思いのほか細い。ただ両端の棟持柱と側柱は、それぞれ２本の丸太材を組み合わせた珍しい構造になっていて、棟木や桁を又受けするようになっていたようだ。こうしたことは大屋根を細い柱で組み上げるための工夫とみられ、そこには期間を限って建てられた工房ならではの有様がうかがえる。

工人達は埴輪をつくるのに、せわしく働いている。傍らには桶がわりに焼き損じた円筒埴輪を埋め込んで、作業に便を図っている。

形象埴輪の製作にはさすがに年配の工人が携わっているが、若者はもっぱら円筒や朝顔形の埴輪を必死につくっている。監督の厳しい目はおのずと若い工人に向けられている。（作画：早川和子）

わたしの紹介・あなたの紹介

和田　　萃

奈良盆地中央部の国中で育った私は、小さい頃から唐古遺跡へ土器や石器を拾いに行ったり、中学生になると自転車に乗って、飛鳥や斑鳩の遺跡を訪ねたりしていた。

しかしエンジニアを志望していたことから、古代史や考古学への関心をもちながらも、理科系コースを選択。工学部の入試に失敗した浪人時代に、いろいろ思案し、また何人もの人達からのアドバイスを得て、文学部に志望を変更した。大学では岸俊男、上田正昭の両先生の薫陶をえて、念願の日本古代史を専攻。研究者となって現在に至る。　（A.W）

和田　晴吾

1948年、奈良市生まれ。平城宮の近くで育ったため、よく人から環境が考古学を選ばせたと言われるが、小さいころは山遊びや雑魚取りに明け暮れ、大きな池と島のあるウワナベ古墳などは恰好の遊び場だった。中学生のころは、ディズニーの動物映画のせいで、大自然の中を行く映画カメラマンに憧れたが、小説ばかり読んでいた高校時代に人間への興味が高まり、関心は未開へと移った。大学入学後は、まず探検部をたずねたが、初日で部長が嫌になり、数日後、考古学研究会に。その後を思えば、未開や古代が、というよりもそのフィールドが体質にあっているのだろう。いまは、葬制を中心に稲作農耕社会の定着から古代国家成立までの過程を跡付けたいと考えている。（S.W）

森田　克行

小さなころから地理の話に興味があり、中学の時に、テレビ番組のなかで何が好きかと尋ねられて「新日本紀行」と答えて先生に褒められたことや半年間で十数回も交通科学館に通った記憶がある。高校進学と同時に地歴部に入った。そこに考古学の原口正三先生がおられた。

高校在学中に多くの遺跡の発掘に参加したが、とりわけ安満遺跡の環濠の調査に深い感銘を覚える。現在は技師として遺跡の調査に携わっているが、とくに高槻城・岡本山古墓群・芝生遺跡などの発掘は思い出深い。

私はいまでも土器の水洗いが好きで、なかでも弥生土器を洗っていると、心が落ち着く。写経というのも、おそらくこうした心境にちがいない。なかなか悟り切れないものである。（K.M）

早川　和子

「年齢不詳」といえども、30代の後半。現在、遺跡の復元画の製作で活躍中。武蔵野美術大学を卒業後、京都に移住。やがて上人ケ平遺跡の出土遺物の整理にアルバイトとして参加する。土器や瓦などの洗浄作業をこなすうちに、埴輪についていた指紋をみつけて、大いに感動したという。その後、石井清司技師に見い出されて、「埴輪を焼く人々（上人ケ平遺跡）」の復元画を製作。これが評判となり、いまでは京都に限らず、平城京跡や吉野ケ里遺跡にまでおよんでいる。

これまでの復元画はどうしても遺構の再現が中心で、人物は復元遺構の物差しとして描かれる場合が多い。ところが早川さんの絵には、「奈良時代の製鉄工場（遠所遺跡）」や「埴輪工房（新池遺跡）」のように、遺構の規模を忠実に再現しながらも、登場する人物がいまそこで活動している人間として生き生きと描かれているところに妙がある。それは、小説に添えられた一枚の挿絵のように、発掘を通して再現される古代のイメージを極めて身近なものにしてくれる。（K.M）

あとがき

昭和63年９月から21ケ月を費やした新池遺跡の発掘調査は、平成２年５月末日をもって終了しました。その間には、埴輪窯・工房などの埴輪生産に関連する数多くの遺構をはじめ、掘立柱建物群からなる古代の集落などを検出いたしました。とくに埴輪生産遺構群は、わが国屈指の規模を誇るところから、調査途上においてマスコミにも大きく取り上げられるなど、一般の関心も高く、現地説明会には大勢の人々が参加してくださいました。

今回は幸いなことに、開発者をはじめ、多くの市民の方々・考古学研究者、さらには関係各機関のご支援とご協力を得まして、埴輪生産に関係する遺構の大半が保存されることになりました。心より感謝申し上げる次第であります。

今後はこの新池遺跡を史跡公園として整備し、埋蔵文化財の啓発や研究にいささかなりとも寄与していきたいと念じております。皆様方のひき続いてのご支援ご協力をお願いするものです。

新　池　遺　跡

発掘調査報告会

「よみがえるハニワのふる里」

１９９０年１２月

編　集　　高槻市立埋蔵文化財調査センター

発　行　　高　槻　市　教　育　委　員　会

印　刷　　昭　文　堂　印　刷　株　式　会　社